

シリーズタイトル『甘々とセイヘキ』
作品タイトル『甘々と甘出し』

副題『ボーイッシュふたなり幼馴染みと卵型オナホールで甘々ルーインドオーガズム♡』

製作・ピーキーズアニメ
原作、脚本・カンノアキ

声の出演・御子柴泉

録音・スタジオベリー

音声編集・カンノアキ

キャラクターデザイン・ななしの

ジャケットイラスト・猫額

ブックレット編集・カンノアキ

——登場人物

・阿佐日まつり——CV 御子柴泉

一人称、ぼく。二人称、（なし）。三人称、ぼくたち。

本作品のヒロイン。性別女性。ボーイッシュふたなり幼馴染み。十六歳。

詳細なキャラプロフィールは、別ファイル『キャラクター、世界観設定』を参考。

バイノーラル録音。

・《あなた》——CV 御子柴泉

一人称、ぼく。二人称、（なし）。三人称、ぼくたち。

人称がまつりと同じ、どこかまつりに似ている。太陽に対する月、というべきか。

声質は中性的な少年で、人妻っぽい、優しげで包容力あり。まつりに似るも、やや低音。

アグレッシブなまつりの一歩後ろに立ち、決して逸れず、まつりを背後から守ってきた。

時々、悪魔のようなことを笑顔で宣う、甘々男の子。

《台詞の表記は全て、《あなた》の台詞。

モノラル録音。

——録音指示表記について。

必ず、赤字で表記。

方向……『右』『正面』『左』……で表記。移動しながらの場合、『↗』で表記。

距離……『遠』『中』『近』『至近』……で表記。移動しながらの場合、『↗』で表記。

方向と距離は、再指定されるまで、同じ方向と距離を維持。

『遠』……会話が出来る距離。

『中』……日常的会話の距離。

『近』……重要な台詞を聞かせる距離。

『至近』……左右は耳元で囁く距離。正面はおでこをつけるぐらいの極めて親密な距離。

トラック0——前説。阿佐日まつりから、あなたへ。

——正面、『中』

「この音声作品は、ぼくこと、ボーイッシュふたなり幼馴染み、阿佐日まつりと一緒に甘出し射精オナニーを高め合う、オナニーサポーターASMRです。

いわゆる本番のない、相互オナニーシチュエーション。亀頭責めオナニーの見せ合いっこを基本に、オホ声、卑語、淫語、疑似フェラ、射精煽り、乳首責め煽り、メス性感告白、オス性感咆哮、精飲、それから……ちよつとここでは言えない展開などエロエロ盛り沢山。幼馴染み同士で受けたり、責めたり、攻守入れ替わったり、じゃれ合っちゃったり……。お互いの気持ちいい表情を求め合っちゃう、オナニー見せ合いっこしながら、甘出し射精を繰り返しちゃうミダラなお話だよ♡」

「推奨環境として、作中でも使用する、某有名な卵型のオナホールで亀頭責めをしつこく繰り返すと、よりディープに楽しめるかも知れないね？」

あとは、作品内でも説明するけれど、甘出し精液を捨てる紙コップも是非準備してね♡卵型のオナホールについては、商品名の代りにヒントをあげると、ワンコインと別税で買えちゃう、安くても本格的な、アレのことだよ。内側のカタチにいろいろなバリエーションがあつて、自分に合うものを探すのも楽しいよね♡ インターネット通信販売のほかにも、全国の成人向け商品充実の書店様や、ドラッグストア様でも探してみてね」

「……ところで、甘出し射精って、なにかって？」

それは、聞いてのお楽しみ♡

知っている人は、お手柔らかに♡ ぼくといっしょに楽しんで♡

初めての人は、ぼくが新しい世界の扉を開くお手伝いになれると、嬉しいな♡

これから始まるのは、セックスよりもエグくて、甘い甘いひと時。

ぼくとあなただけの、ドエロくて甘々な時間を、心の底から体の全部で、楽しんでね♡

それじゃ、『甘々と甘出し』……（正面、『至近』↓）ぼくと、シてみよっか♡」

トラック1——プロローグ

SE、授業終了のチャイムが鳴る。
場所、放課後の学校。

阿佐日まつり、あなたに近づく。

――右『中』

「（気心知れてるので、一文字で呼びかける感じ。↓）や。お疲れー。一緒に帰ろ♪」

学校から出て、下校の路。

季節は夏、具体的には七月中旬。むせ返るような蝉の声と、街の喧騒。

まつりは勉強ができるタイプ、秀才。

――左『中』

「やっとテストも終わりだね。いやあ今回も大変だった。授業内容の理解度はともかく、一字一句暗記を強要されるう……勉強時間ばっかりかかっちゃって」

「世の中は物の名前よりも、力学とか法則とか、体験とか理解が重要だっと思わないー？」

「それが何であるかを理解してこそ、その名前が必要になるのであって、名前だけ憶えても意味なんてないんじゃないかな。理解にはまず丁寧な体験があるべき……なんて、さ」

まつり、学生らしく益体もない眩きも飽きたのか、大きく超健康的に伸びをする（ASMRなのでお見せできないのが残念ですがこの時、乳の動きが超健康的にエッチである）。
「くーっ……ああゝゝ、肩こった。でも、今期もこれでおしまい、もうすぐ夏休み……ふふふゝ夏休みだっ♡（夏休みが待ち遠しくなって、即興でユルいメロディで口ずさむ。↓）どーこへ行こっかなゝゝ♪ なーにして遊ぼっかなゝゝ♪ 探検ほくの街ゝっ♪」

まつり、あなたの顔を覗き込む。

――左『近』

「……って、どうしたの？ そんな深刻な顔しちゃって」

まつり、少しだけ、魔が差したような、いたずらっぽい顔をする。

「……はーん？ さては、テスト勉強で忙しくて、ちんちんしこしこ忘れておったなー？」

あなたのビックリする間にこそ、蝉の声がいやに高く聞こえて、双方大変に気まずい。まつり、不意に慌てる。

――正面『中』

「あっ……いや、その……おかしいこと言って、ゴメン。（自爆発言。↓）ほっ……ぼくは、そうだからっ」

まつり、自爆してしまったので、軌道を修正しようとするも、どんどんと誘爆を繰り返して、だんだんと顔真っ赤になる感じ。

—左『中』

「だだったって……トイレで済ませちゃおうとか、お風呂でやつつけちゃおうとか、毎日思うんだけど、でもそんなことじゃ全然満たされないっていうかつ、じつくりゆつくり時間かけてって思っても、じつくりゆつくりテスト勉強しないといけないし、先に済ますと眠くなったりするし、結局自分を慰められなくてへとへとになってベッドに倒れ込んで、悶々としたまま眠りこけちゃったりして、ぼくっ——何言ってるのかな。あはは……」

いらんことをいうてしもうた、という失敗を取り消そうとして、更にいらんことをいう。「夢精、でもしちゃえば楽で良かったんだけどねっ、あっははは……」

更なるいらんことだったので、当然しょぼしょぼと声はしぼんで。

「……ごめん」

しぼみきって、元気がまるで足りない、捨て鉢のため息をひとつ。

「はあ……」

捨て鉢のため息から、開き直った本音が出る。

「ゆつくりオナニー、したいよね……」

「精液、ぐっぐっ溜めて溜めてからの、いきそうでいけない感じ……気持ちイイよね……」

「寸止め？ まあ、寸止めと言えは寸止めなんだけど……もつとギリギリの概念ってことになる……のかな？」

開き直ると、なんだか会話が始まってしまったので、まつりはくすりと小さく笑う。

「くすっ♡……思えば小さい頃からずっと一緒だけど、こんな話、したことなかったっけ」

「……そうだよ。見た目普通の女の子で通ってる阿佐日まつりが、溜まった精液を夢精も出来ずに悶々してるふたなりさんってこと、判って欲しい幼馴染みはひとりしかないよ」

幼馴染みであるあなたを意識して、まつりは優しい思い出に心が還る。

—正面『近』

「昔さ、いくつの頃だったっけ、夏休みだったと思うんだけど……ぼくたち揃って用水路に落ちてさ……二人一緒にずぶ濡れになったよね。ぼくの家と一緒にシャワーを浴びて……その時、ぼくに生えてる……（まだ羞恥があるので少しだけ発言を躊躇う。↓）おちんちんを見て、驚きもしないで……」

『「一緒だね、おんなじだね」』

「……って、言ってくれたよね……」

「その言葉がずっと、嬉しくて……忘れられなくて……」

「……今でも、一緒に、おんなじだよ……」

まつり、思い出から心が戻って、自然にボンと話す。

—左『中』

「さて。ぼくは、五日です」

「……なにして、オナ禁してる日数だよ」

「ねえ？ そっちは何日我慢してるの？ 何日頑張ったらそんなにフェロモン漂っちゃう顔になるの？（人懐こく。↓）ねえねえ？ 聞きたーい、教えてーっ（あなたは、答える）

……え？（あなたの答えに思わず熱く溜息。↓）……う、わあ……」

まつり、あなたの回答に対して昂ぶりがゾクゾク来ている。

「すごい……♡ 三日分以上の精液は体内に吸収されるって有名な話もあるけれど、こういうのは、飢えたケダモノに鎖をつけた期間がどれだけ長いかって問題だよね……？」

まつり、重く、静かに、発情を高めていく。

「溜められる精液の量には上限があるとしても、性欲は無限だと思わない？」

「判るよ。すっごく下半身イライラして……オナニー、やりたくてたまらないって」

「無限の性欲が溶けちゃってる、とろとろの精液を、どぼどぼ吐き出したって」

「全部、判るよ。ぼくたち、おんなじだよ……発情止まんないケダモノの顔、してるもの」

まつり、あなたの耳元に唇を寄せ、そっと、しかし熱っぽく、囁く。

——左、『至近』有声音囁き。

「ぼくの家で、一緒に、ゆっくりと……オナニー見せ合いつこ、してみない？」

体を引いて少し距離を取り、瞳孔開き気味の発情した瞳で、顔を覗き込んでくる。

——正面、『近』

「ひよっとして、ぼくのこと、人畜無害な幼馴染みだと思ってた？」

「ザンネン♡ 性欲グツグツに煮えちゃってるふたなりさんを舐めんなよ？」

「オナ禁中のふたなりさんは男の子とおんなじで、あーやりてーっ、精子出してーって、ちんちんイライラしてるって判ってよ」

「今までずっと、何をするのも一緒だったのに、エッチなことは別なの？ コソコソ独りで精子コキ捨ててるなんて、ぼくたち揃ってお互いに遠慮し過ぎ。水臭いって思わない？」

「アブない遊びはいつも一緒だったよね。オナニーも一緒なら楽しいよ、絶対♡」

まつり、とどめを刺すように、耳元に口を再び寄せて、誘惑する囁き。

——左、『至近』有声音囁き。

「絶対、気持ちいいよ？ 幼馴染みをおかずにオナニーするの♡」

「今日は夜までうちの親いないから、あんあん喘いでも、おんおん唸^{ウナ}っても、ぜんぜん、オッケーだよ♡」

「遊んじゃお？ 身も心も夢中になって、我を忘れて、長い時間を淫らに甘々と浸り切っちゃう、トロトロでアブないオナニー……一緒にしちゃおう♡」

トラック2——オスアソビ

——まつりの家、まつりの自室。エアコンの音など、次第にフェードアウト。

まつり、盛大に誘惑してあなたを自宅に連れ込んだくせに、往生際悪く言い訳がましく。

——正面、『中』

「（聞かせるつもりかの独り言。そういうのを弁解という。↓）うっわ……とうとう、やってしまったよ……、幼馴染みをえつちな目的で家に連れ込んだやつたよ……」

まつり、気を取り直して、しかし緊張バッキバキ、必要以上に芝居がかって大仰に話す。まつりの癖は指差し確認。冒険の前には、いつも指差し呼称で準備を確認する。

「……（咳払いのフリ。↓）こほん……では指差し確認——クーラー、よし。日よけと視線よけのレースカーテン、よし。内側からの施錠、よし。麦茶のボトル、よし。氷いっぱい詰めた保冷タンブラーふたつ、よし。タオル類、よし。ティッシュボックスの中身は充分、よし。紙コップひとつ、よし。オナホール用ローション、よし。そして卵型のアレがふたつ、シート開封済み、よし……以上、オナニー準備全てよし、連れ込み環境に問題なし」

準備よし、問題なし、などと言ってみても、足りないものは明らか。それは勇気。

まつり、バッキバキに緊張しているが、意を決して話す。

「じ……じゃあ、これからぼくたち、オナニーの見せ合いっこをするわけなんだけど……難しく考えないで遊びのつもりで気軽に、でも真剣に、ギリギリのアブない、気持ちいいオナニーを追求していきたいなって、思うんだ」

「そのために必要なものは、ルール……遊びやゲームには、ルールが必要だよね？」

「お互い、オナ禁中の飢えたケタモノだから、どっちも相手を押し倒しちゃったり……しちゃいそうだよね？」

「ぼくだって、その……穴という穴に……おちんちんブチ込んだじやないって、どこかで思ってるわけだし、ぼくもそう思われてたりするんだろうけど……」

「でも、これからすることはオナニー。相手に触らず、自分の体だけを触って、お互いにオナニーのおかずにしたりされたりして、気持ちよさを引き出すこと。これがルール」

「このルールを守りさえすれば、どんなことをしても構わない……ってことになるかな」

「相手の顔や体を視姦してオナニーするのもよし」

「エロい声や言葉で煽っちゃってもイイし」

「脱いで裸を見せ合うのもスゴく興奮しそうだし……」

「まだまだあるよね？ 相手に触れずに、相手を気持ちよく感じさせて、自分も気持ちよく上り詰める方法……ひらめき、アイディア次第で何でも出来ちゃいそうだよね？」

「受け身でいるのは勿体ない。攻めっぱなしのつもりでいると足元すくわれちゃう」

「ほらほら、ゲームらしくなってきた。アブない遊びって思わず真剣になっちゃうよね？」

「……だけど、おさわり禁止のルールを破ったら、このゲームはそこでおしまい」

「ペナルティは……そうだね？ お互い、相手の穴にぶち込むものを持つてるわけだから、ルールを破った相手を一方的に犯す、って約束でどうかな」

「それも反故にされるようじゃ、寂しいなって、思うけど……」

「初めてだから緊張してるんだよね。起たないのが不安になるよね……でも、大丈夫だよ」

まつり、立ち上がり、あなたと向かい合う。

——正面、『近』

「てのひらを貸して……（あなたの手を取り、スカートの腰もとに導く）ほらここ。ブラウスと繋がってるスカートのボタン……スカートのホックも外して、ジッパー下げて」
「ぼくが脱がせたから、ぼくも脱がされなきゃフェアじゃないよ？ ……スパッツとパンツも、降ろして……うん、そう……」

ぱさり、とスカートが落ち、するりと、スパッツと下着が降ろされる。

まつり、緊張は変わらず、興奮が高まっていくのに、言葉は順序立てて冷静。

「ね。ぼくも、初めてで緊張してる……おんなじ、ふにゃふにゃの、おちんちん……だよ」

まつり、言葉を探しながら、少しずつ確認するように、優しく話す。

「起たないと挿れられない、起たないと困るのはセックスのことだよ。ぼくたちは、焦ったり、ムキにならなくなつて良いんだよう？ だって、これからするのは、オナニーだもん。パンパンに溜まってギチギチに固まった性欲を、少しずつほぐしながら、自分を甘やかして、性感を育てて、気絶しそうになるぐらいに気持ちよく上り詰めることだもん」

「今のおちんちんの感じ方、判るよ。ぼくも一緒だよ。起つてなくても、ふにゃつとしていても、おちんちんと、おちんちんの奥底が熱い感じ、だよな？」

くすりと、人が違うような艶っぽさで、まつりが小さく笑う。

——右、『至近』有声音囁き。

「くすくす……こういう時つて、先っぽがすごおく、気持ちいいんだよね？」

——正面、『近』

まつり、かぼつと、卵型オナホールのケースを開けて、あなたにひとつ渡してよこす。

「ほら、卵型のオナホール、あげる。使ったこと、ない？ ふにふに柔らかいのが可愛くて、卑猥で、なんか好きなんだ♡」

「ローション注すよ？ お好みの量をちゅーと……ぼくはちよつとだけ、潤うるおすぐらい。どうせすぐに、カウパーでぬるぬるになるんだし」

まつり、手慣れた様子でオナホールをセットアップ。

「両掌で挟んで潰して、拝むように掌を擦り合わせてローションを馴染ませれば、と……」

まつりは、これからの行為の期待で発情し切っている。

先ほどと同じセリフなのに、とても同じとは思われない。

「——オナニーの準備、すべて、良し♡」

——正面、『やや下方、近』

「（まつり、座る。↓えへへ、胡坐あぐらかいちゃう、お行儀わるいかな。ほーら、突っ立っていないで、お座布団ざふとんに座つて座つて。おちんちん、見せ合っちゃおうよっ♡」

ふたりは真正面に向かい合つて、床に座る。両者、ゆつたりと胡坐をかく。

——正面、『近』

「勃起しないと挿入できないのはセックスだけのことから。亀頭が敏感な、ふにゃふにゃおちんちはオナニーならご褒美、むしろチャンスだよ？ ……こーやって包茎おちんちんの皮を剥いて……（あなたの露出した亀頭に震えるような発情の吐息。↓）ああ……おちんちん、可愛い……ぬるぬるオナホを被せてよ……摘まんでオナホの空気を抜いて、亀頭をプチョって、押し込んだじゃって（未勃起の男性器をホールに挿入）……（息を詰める）んう……（詰めた息が軽いオホ声で出る）お、ほお……♡」

まつり、粘膜を直に触る感覚に、ぶるりと、身震いして。

「……くうう……ぼくのよわよわ包茎の亀頭も、ぬるぬるオナホならぜんぜん痛くないよ。よわよわ粘膜がオナホのつぶつぶヒダヒダにねろねろくすぐられて、甘々に、甘やかされちゃうの、好き……」

「このまましごくとすぐにいっちゃいそうだよ。たっふたふに溜まった精子吐き出したくて我慢できないよね？」

「でも、駄あ目♡」

「卵型オナホだからこそ出来ることをシよ？」

「おちんちんしごくのは上下運動だけど、これからぼくたちは、回転運動だけシまーす♡」

「こうやって、亀頭の力りよりも上にだけオナホを被せるように気を付けて、指でつまんで、くり、くり、くり……いい……って、ゆっくりとオナホを回すんだよ……おおっ」

「回したりいい……戻したり。小刻みに回して戻したり、いい……掉じゃなくて亀頭の粘膜だけを直接、ねぶねぶしてあげるんだよ……おほお……氣イ持ちいい、動物みたいな声出ちゃうう……おおっ。ほおお……」

「ぼくがふたなりさん、だからかなあ？ 気持ちいいと、声が抑えられないんだよ……おほお、粘膜が、敏感に……おっ♡……なっちゃうよお……おほお♡」

「はー、はー……やばい、こんなに感じるの初めて。少しペース落として、ゆっくり丁寧にしちゃお……」

「……ほおら。おちんちん、もう起つてきたよ♡」

「オナホ回転運動で緊張ほぐされてるう♡」

「緊張おちんちん、ばいばーい♡ びきびきおちんぼ、こんなにちはっ♡」

「はあ……♡ ぼくたちの弱々おちんちん、もうすっかり強々おちんぼ様だよ♡」

「えへへ……♡ おちんぼの大きさは、ぼくもちよつとは自信があつたんだけど、そっちもおっきいね……えへへ、ふたりともおんなじぐらい、だね？」

「一緒だね、おんなじだねって言ってくれた子どもおちんちんが、今じゃおんなじサイズの大人おちんぼ。なんだか、嬉しいなって♡」

まつり、試すような、または性的興奮を煽りに行くような悪戯っぽい口調で、台詞左右に振り、徐々に接近、左右の耳を挑発する。

——右、『近』

「それともお？ ぼくのおちんぼ、もっとちっちゃい方が可愛くて良かった？」

——左、『近』

「それともそれともお？ ぼくがもつとムキムキの巨根だったらあ、どうだった？」

——正面、『近』

「サイズに差があるおちんぼだったら、ぼくは……どうしちゃったかなー？」

——左、『至近』 有声音囁き。

「ぼくよりちっちゃいおちんぼには、可愛い可愛いって、ちゅっちゅしちゅったかも？」

——右、『至近』 有声音囁き。

「ぼくよりおっきくてカッコいいおちんぼだったら、めろめろって頬ずりしてたかも？」

——正面、『至近』 有声音囁き。

「あ♡ 今想像したよねー？ 駄目だよお？ オナニー見せ合いつこなんだから、性器どころかお肌だって、おさわりしちやいけませーん♡ ぼくもしませんからよろしく♡」

——正面、『近』

「……（また思い出に心が還り、この「」内だけ言葉が優しく。↓）やっぱりぼくは、おんなじぐらいの大きさが良かったなって。他人とは思えないぼくたちふたりのことだもの」

「ね？ 勃起したら射精したくなるのが普通だけど、こうして亀頭の粘膜だけ触っていると、いきたいのにいけない感じ。いけないから、ずっと、甘々な快感が少しずつ足し算され続ける感じ……コレが続くと……んん……どうなっちゃうと思う？ ……ねえ、ルーインドオーガズムって……知ってる？ 甘出し射精、とも言うんだけど……」

以下、説明台詞が続くが、ホールを回す動きは両者、続ける。

快感の加算を低めにコントロール。最初は性感で熱っぽいけど、だんだん落ち着いてくる。

「……ふー。整理して説明しながら、ゆっくり、ゆっくり亀頭責め、続けるよ……ふーっ」

「ルーインドオーガズム。『ダイナシの絶頂』って意味なんだって」

「おちんちんをすごいで、いきそうな瞬間に手を放して、絶頂をダイナシにすると、少しだけ射精はする。でも絶頂してないから、なんどでも射精を繰り返すことができる」

「……って、いうんだけど……ぼくは、ちょっと違うと思うんだ」

「そもそも、オナニーって、気持ちよくなるためにするものだよな？」

「だけど、おちんちんの棹だけしごき続けていると、あまり気持ちよくななくても、精液出ちゃうときって、あるよね？」

「急いで射精してもあまり気持ち良くないのに、それを繰り返しても気持ちのいいオナニーとは言えないと思うんだ」

「射精することと、オナニーの気持ちよさは、必ずしもイコールじゃないんだ」

「じゃあ、気持ちのいいオナニーって、なんだらうって」

「それは、急ぐの反対で、ゆっくりと気持ちよさを、性感を高めるオナニーだよな」

「じゃあ、どこを愛撫して、性感を高めたらいいのかな？」

「結論から言うと、それは今、ぼくたちがオナホで回転刺激している、亀頭だよ」

「棹を刺激しない亀頭オナニーは、射精感を高めずに、性感を高めるオナニーの方法なの」

「勿論、亀頭にも射精を促す性感帯、裏筋や尿道口があるから、刺激し続けると最終的には射精しちゃうけど、棒を触ってないから簡単にはいけない」

「亀頭を刺激し続けていると、性感は高まるのに射精感が追いつかないから、気持ちいいのいけない、絶頂直前の気持ちよさが長続きするの」

「気が狂いそうなほど性感が高まって、高まって、いけない、ああでも、もうだめ、いつちゃう、精液が漏れちゃう……っていう、亀頭オナニーのクライマックスで刺激を止めると、どうなっちゃうと思う？」

「ぼくたちが目指してるのは、それ。亀頭オナニーのルーインドオーガズムだよ」

「亀頭オナニーでダイナシ射精すると、絶頂してないから、しつこく高めた性感がリセットされないんだ」

「とぶとぶ、甘々と精液を漏らしても、絶頂さえしなければ何度でも気持ちいい」

「亀頭を責めれば責めるほど、気持ちよさが持続しちゃう」

「絶頂の直前の気持ちよさは、射精の気持ちよさとは別なんだって理解^{わか}らせられちゃう」

「絶頂して射精することがオナニーの快感の全てじゃない」

「絶頂直前の快感は、絶頂と射精の快感に負けてない」

「ルーインドオーガズムは、射精してもしなくても構わない」

「ただ、絶頂の直前の気持ちよさを、甘々と、長々と、だらだらと味わえればそれでいい」

「絶頂と射精は一回で終わりだけど、ダイナシ射精は何度でも気持ちいい」

「ルーインドオーガズムは絶頂をダイナシにするのが目的じゃない。絶頂の直前の快感を持続させることが目的なんだ」

「ルーインド……ううん？　こんなしつこい気持ちよさ、ダイナシとは呼べないよね？」

「……ぼくは、ルーインドオーガズムって呼び方よりも、甘出し射精って言い方が、好き」

「甘々とろとろ、絶頂しない甘出し射精を繰り返すのが、すごく、大好き♡」

「そんなどろどろのオナニーにピッタリな道具って……：亀頭だけを安定して責め続けて棒を刺激しない、刺激の強さは指先で自由に換えられる、ローションを蓄えて精液を受け止める……：今、ぼくたちの亀頭に被せてくるくる回してる、これ、だよね♡」

まつり、長い説明が終わり、ちよつと照れ臭そうに。

「ごめんごめん。説明、長くなっちゃった」

「でも気付いてる？　……ずっと、亀頭を回転運動で愛撫し続けているんだもの。いつの間にか、性感が高まってきていることに」

「冷静なフリしても、体は正直だよ？　ちよつと刺激に慣れて物足りない感じかな？　でも、それはずっと同じレベルの気持ち良さを感じ続けているから。性感は消えてない。ずっと、隠れて回転し続けている。意識の外で、深くで、くるくる回り続けているよ」

まつり、不意に淫靡な顔を覗かせ、耳元で囁く。

——左、『至近』有声音囁き。

「ここから回転を激しくしちゃうと、どうなると思う？」

「レベルを急に上げられると、おちんぼ、耐えられなくなっちゃうかも知れないね？」

まつり、耳元から顔を引いて、目を見る距離でにんまりと、薄い笑みを浮かべる。

——正面、『近』

「ところで、オナニーには、おかずが必要だよね？」

「急なハナシじゃないよ？ ……さつき、おほ声、出ちゃったぼくを、おかずにしたよね？」

「いいんだよお？ オナニーにはおかずが必要だもんね？」

「ちょっといい女、ちょっとかわいい娘、気の置けない幼馴染み……ムラっとした思い出を夜のベッドに大切にお持ち帰りして、妄想のなかでぐっちょんぐっちょんに犯しちゃう、オナニーのおかずにしちゃうのは普通のことだよね？」

「なのに、どれだけ妄想に欲情をぶつけても、独りのベッドの熱情は相手に届かない……だから、ぼくはずっと……（発情のボルテージが静かに、急に上がる。この「」の末尾で発情がピークに。↓）ずっと昔から、こうして顔を合わせて、おかずにしたりおかずにされたり、一緒にぐちゃぐちゃに溶けちゃうオナニーを、してみたかったんだあ♡」

「遠慮しないで。ほおら……ぼくに、もおつと欲情してえ……ぼくを見てえ……今まで性欲があることも秘密にしたた、むつとりドスケベ幼馴染みをお、たあつぷり、おかずにしてよお……（ゆっくりと口を開きながら、あなたの耳元に顔を寄せて。右、『至近』↓）……くああ……れろおん……」

耳元で疑似フェラ煽り。口を水面の鯉のように開き、あどけなく、話す。

——右、『至近』。

「れろろれろお……ふああ……れろおん……オナホって、おちんぼしゃぶしゃぶされてるみたいだよねえ？ ふちうって唇が吸いついて、べろでゆっくり、なめなめするお……れろろお……」

「（スローテンポ。疑似フェラでもピストンは絶対にしない。舐め回す、吸いつく系で、ゆつくりと煽る）れーろ、れろれろ、ちゅー、ちゅーちゅー、ぶあ。れろろろ、れえええろ」

「れろろろろ……れえええろろろろ……れろれろれろろ……れええろおお……」

「オナホじゃなくて、ぼくのお口で気持ちよくなりたひ？ ぽっくん亀頭だけ啜へられへ、尿道口ひや、裏筋い、カ리를全自动で舐め回されたひ？ ……駄あああ目えへえ……♡」

「そうひたら、オナニヒじゃなふて、セックシユになっひやうもんねへえ？ ……じゅううう、ちゅうううう……セックシユじゃなふて、ホナニヒ、したひんらもんねへええ？」

「ぼきゅたち、変態だひよお……セックシユよりもオナニヒが大好きなんらもんねええ」

「お互いをおかずにしちゃってへええ、自分勝手な性欲見せつけ合ってえ、どろどろに汚しあっひやううう、性の捌け口にしあっちやうよほお……れえろろろ、れろろーお、じゅじゅっ、じゅるるる……」

まつり、少し体を引いてあなたの下半身を確認し、その怒張に色めき立つ。

——右、『近』

「（この台詞内、口を閉じた通常の喋り方。興奮して疑似フェラを忘れる感じに）はわああ……♡ おちんちん、ばんばんにガン起ちしちやってるううう……小さい頃から知ってる

可愛いおちんちんじゃなくてえ、ガチ勃起したおちんぼ様だよおっ♡

顔を耳元から引いて、正面で蠱惑的に開いた口内を見せつけるように疑似フェラに戻る。

——正面、『至近』

「れろおお、れろ、れーろれろ、ちゅーっ♡ つよつよおちんぼ様ああ……こんなに立派様だとお口に入らないよほお……っ♡ ちゅーっ♡」

「あふーっ♡ おっきいとあご外れちゃふよお……っ♡ ムキムキかつこいー亀頭をおくひであむあむして、めろめろに平伏してキスちゅっちゅしてあげゆよほおおっ♡」

まつり、興奮してだんだん台詞のテンポが上がる。

「ねえええ？ ぼく、なれてるかなあ、オナペットに、なれてるのかなあ？」

「幼馴染みを疑似フェラで煽り倒すド変態のオナペットになれてるのかなあ？」

「今日からぼくの喋ったり飲んだり食べたりする唇を見る度に、亀頭ハムハムされてえーっつて、チンイラしてくれるのかなあ？（口を何度も開いて煽る）くばあっ♡ あえーっ♡ えうーっ♡ ほらあっほらあーっ♡ いつでもチンイラしてよほーっ♡」

「ぼくのおくち視姦してるう、えっちな目つきに気付いたらあ、指で輪っかを作つてえ、べろをれえろーっつて伸ばしてえ、エアフェラでこっそり応えてあげちゃうよほお♡」

「ナマイキおくちオナホお、ふああって、いつでもおちんぼ様煽っちゃうよおっ♡」

「今日からずっと、ぼく、視姦されっぱなしになれるかなあ、なれるよねえ？」

「なりたい、なりたい……ぼくう、幼馴染みオナペットになるうううっ♡（急に低音、唸る、しつこいオホ声。↓）う、う……おっおほお♡ おおおっ♡」

まつり、興奮極まり、低音の呻きがとめどない。疑似フェラパート、ここまで。

——正面、『近』

「きっ……効くう♡ やばいいいいっ♡ ぼくで興奮してオナホくるくる回し続けておちんぼ様オナニーしてくれてるのっつ、堪らないよおっほおおっ♡」

「ぼくも指が止められないよおっ♡ 粘膜の感覚が開いちゃってるっ♡ お花が咲くみたいに満開しちゃってるうっ♡ 性感火がついちゃったよほおっ♡」

まつり、興奮で台詞のスピードアップ。

「いきそう？ いっちゃいそう？ でもでも、おっおおっ♡ 回転運動をキープっ♡ キープだよっ？ 山登りをイメージするのっ♡ ピストン運動は山頂まで最短距離を一気に駆け上がる動きっ♡ 回転運動は山肌に螺旋を描いて最長距離で上り詰める動きだっつおほおっ♡」

「山頂に到達すると絶頂しちゃうのは直線も螺旋も一緒だよっ♡ 距離を伸ばして時間を稼ぐのっ♡ いきそうアへっちゃう時間を何倍にも引き延ばすのおおっ♡」

「前立腺がギチギチしてきた？ 何日も貯めた精液をおちんぼから熱ういビームのように発射したくて前立腺が圧力高めてる？ はああい、前立腺センパイお疲れ様ですっ♡でも残念でしたーっ、回転くりくり運動続けたままで前立腺の力を、抜きます……っ！」

まつり、顔をくしゃくしゃにして、ふやけた声で呻く。ここから台詞スピードダウン。
トロ顔、トロ声、トロトロの快感に意識と肉体が浸^{ひた}されている。

「う、にゅうう……ひゅうううう……おちんぼの根っこの筋肉から力を抜く感じだよお？」
「おしっこする時みたいな力の抜き方、なんだけど……♡」

「前立腺をコントロールする筋肉はあ、骨盤底筋^{こつぱんていきん}のなかにあるPC筋っていうんだけどお、名前だけだとイマイチぴんとこないから、おしっこの筋肉で、まずは問題ないよねえ？」
「その力を抜くと前立腺が精液を勢いよく発射できなくなるのとお♡ 快感を防御できなくなる感じの両方であ……♡」

「筋肉に力を入れる時であ、基本的に刺激を我慢する、防御する時だと思うんだあ」
「射精が近付くと前立腺まわりの筋肉はムキムキ力^{りき}んで、射精するぞーっ精液ぶっ放^{はな}すぞーっ雄^おっぽくオラついちゃうけど、それは性感が怖くてガードを挙げてる状態でもあると思うんだあ♡」

「前立腺は雄面^{オスツラ}してるけど、実はとっても臆病さんなのお♡」
「力を抜いたらノーガードで雑魚雌^{サコメス}みたいにならなから強がってるだけなの♡」
「ぼくたちのイキってる前立腺センパイをバチボコに龟头オナホ回転攻撃でフルボッコ、しちやおーっ、お、おおっ……（一気にアへる。↓）おほおおおーっ♡」

まつり、トロからアへにシフト。時折、絶叫が混ざる。台詞スピードまた徐々にアップ。
「おおお……あへえ……ひあああ♡ ガード不能攻撃でええっ前立腺ふやけちゃう♡」
ずっと気持ちいよ♡ いく前の気持ちいのがずーっと続いちゃう♡

「あは♡ 足がバツバタ痙攣^{けいれん}しちゃってりゅ♡ 暴れても気持ちいい拷問から逃げられないのに体がなす術なく悶絶^{もんてつ}してりゅ♡ ノーガードで龟头オナホ攻撃され続けて我慢できなくなってきたりゅ♡」

「ペース上げて甘出し射精するから見ててね♡ はーいこれがお手本だよ♡ ——
（駄々っ子っぽく甘える。↓）でもでもでもやっぱひとりには嫌^{いや}♡ 一緒にいく♡
一緒に寸止める♡ ぼくたち一緒に♡ 今までもこれからもずっと一緒に♡
甘出しも一緒に嫌^{いや}嫌^{いや}嫌^{いや}♡ 一緒に甘出し射精するの♡」

「ペースアップ♡ 回転速度上げまーすっ！ ——（回転速度を上げた途端に即オホる。
↓）おっおっオナホがっソリソリソリソリいいいってえええ♡」

「オナホ内側のヒダヒダがあああ龟头粘膜^{こうたんねんまく}こそいじやううう♡」
「ほおお♡ おおおほおお♡」

「射精感んっ！ きつきたっ、ちよつとずつ上^あがってきてるっ来てる来たっ♡」
「おおお一緒に甘出ししよっ？ タイミング合わせよっ？ カウントダウンと回転速度と射精感を調節して一緒にギリギリの寸止め目指そっ？」

「いきそうならゆっくり、いきそうじゃないならスピード上げてっ」

「秒読み五秒から入りまーすっ♡」

「ゼロで寸止めできるように合わせてこっ♡」

「5！ —— まだまだいっちゃだめだよっ？」

「4！^{よおしん} いく寸前の快感を引き延ばしてっ♡」
「3！^{さんっ} カウント最後にオナホをつまんだ指を完全に離すよ♡」
「2！^{にーい} 精液チビっちゃいそうになったっ♡」
「1！^{いちっ} 次々次々次でっ手を離すよっ——手を離してっ！」
「ぜろっ！」

「ぜろっ……ぜろっ……精液がっ……尿道から漏れるっ……ぜろっ……ぜろ……ぜ、ろ……お……」

「前立腺の力を抜く感覚がっ不十分だと……ビクンビクンって勢いよく発射するように漏れる時があるけど、射精感で頭が真っ白になってなければ大丈夫……慌てないで、手はオナホから離れたまま、だよ……絶頂してないなら甘出し射精、成功、だよっ♡」

——左、『至近』。

「……ふふふ♡ 不完全な射精でムズムズする？ これでおしまいは嫌だなーって、欲求不満？……じゃあ、甘出し射精が落ちていた所で、オナホをまた指で摘まんて、くりいて、回すと……（即墮ち。正面、『近』↓）んほおおっ♡」

——正面、『近』。

「ねえねえねえっ？ すごいでしょっ？ 気持ちいいおちんぼ様生きてるでしょっ？」
「えっちな気持ちとえっちな体が終わってないよっ♡」
「じゃあじゃあっ♡ 容赦なく、ウェーブ2スタートっ♡ ほおおおおーっ♡」

「おしまいにしたいなら寸止めせずにオナホを回し続ければ絶頂に達して終了、だ、け、ど、お、おーっ♡」

「しつこくいきたいーっ♡ 何度でも甘出ししたいーっ♡」
「だから次も5カウントで甘出し目指そっ？」
「甘出しの直後は絶頂がまだ近くにあるから、もうカウント入りまーすっ♡」
「オナホ回転オーバーランして本イキ絶頂しちゃうことだけ気を付けてねっ」
「寸止めカウント開始ーっ！」

「5！——あーきもちーきもちーきもちーきもちーっ♡」
「4！ 幼馴染みと一緒に甘出し目指しちゃうのすっげ気持ちーっ♡」
「3！ ずっと一緒にシタかったヤリたかったオナニー見せ合いつこしたかったっ♡」
「2！ ぼくをおかずにして欲しかったっ♡」
「1！ 叶っちゃった叶っちゃったぼくたち今オナニー見せ合いつこしてるーっ嬉し
よおーっ♡」
「——手を離し、てっ……ぜろっ！」

——正面、『至近』。

「ぜろ……お……精液の塊が……尿道押し広げて、ドロンて……漏れる……ぜろ……」

「……ふ、ふふっ♡ ふふふー……っ♡ 二連続で甘出し、しちやったね♡」

「クーラーかけてるのに二人とも汗スゴイし、ちよつと一息入れよつか」

「……それに……？」

「……んっ♡ 精液こぼさないように、おちんぽ抜いてえ……っ」と

まつり、紙コップの上でホールをひっくり返し、

「準備していた紙コップに精液を捨てると処理が安全、簡単ってわけ」

「ほら、そっちのオナホもこの紙コップに……うひゃー、すごい♡ 白濁汁がどろんどろ

ん出てる、本イキしてないよね？ ちゃんと甘出しだよね♡」

「ふええ……紙コップに精液がいつもの倍入っちゃった……手応えズシっ♡ 精液重っ♡」

「じゃ、紙コップはまた後で使うから置いていて、麦茶で一服いれよつ?」

「先はまだまだ、長くなりそうだし……ねっ♡」

トラック3——メスアソビ

まつり、麦茶を飲む。

——正面、『中』

「くび……くび……くび……ふはーっ」

「はぁ、失われた体液を潤す麦茶が美味しいっ」

まつり、一息ついて。

「ふ。ふたりでオナニーすると、こんなに汗かくななんて思わなかったよ」

「やっぱり激しく乱れちゃってるから、だよね……（少しだけ我に返って、己の痴態を思い返して密かに赤面、自らに向けて小声で呟き反省。↓）というか……はううう……絶頂前で狂っちゃってたとしても、あんなにべたべた一緒一緒って、子どもみたいに甘えちゃうとか、同時甘出し射精迫っちゃうとか、ぼくの本性って食欲でワガママで甘えん坊なのかな？……（頭を振って気持ちを切り替え。↓）いやいやいや、それはそうとっ」

まつり、にっこりと咲くような笑顔。

——正面、『近』

「服、脱ごっか♡」

「そう。全裸♡」

動揺するあなたに、まつりはいたずらっ子な顔をして。

「ははーん？ 流石に全裸は恥ずかしいと見えますなー？」

「まあぼくだって、ちよつとどこるか大変に、幼馴染みの一糸まとわぬ全裸様ぜんらさまに興味があるわけけど、別の心配をするわけですよー？」

「汗ですよ、汗。ぼくたちどっちも、汗ビッシュリになってるの」

「そんな格好でクーラーの効いた部屋にいたら風邪ひいちゃうよ。だいたい、濡れた制服を着て家に帰るつもり？ 室内干しでも時間をかければ多少は乾くと思うから、ほら、脱いだ脱いだ♡ それとも、さっきのパンツみたいに脱がされたいのかなー？」

しぶしぶとシャツのボタンを外すあなたを、まつりが見ている。

「男子の夏制服の半袖シャツって、ネクタイと前ボタンだけだから簡単で良いよねー。うちの学校の女子制服の夏セーラーって、ボタンやパーツが多いたら……」

「（ちよつと寂しそうな気配）別にセーラー服が嫌いってわけじゃないけど、ぼくはズボンを履きたいな……上はセーラーで下はマリンス룩なパンツスタイルとか、選べたらいいのに……まあ、プリーツスカートの下にスパッツで、我慢してあげよう、かなって……」

「（寂しそうな気配を引っ込めて）あー、でもね？ プリーツの下に体育のジャージは、ちよつと野暮ったくて趣味じゃないっていうか。短パンもイマイチ、カッコ良くない気がする。スパッツならギリギリ、ぼくの美学に合うかなーって。まあ、贅沢な悩みだよな」

「ささ♡ 観念して下着のTシャツも脱ぐ脱ぐ♡」

「干してあげるから服、全部ちようだー……（お調子者ムーブは、突然失速、鳩が豆鉄砲とはこの顔。あなたの裸体に呆然と、視線釘付け。フリーズ状態）……いい？」

「……あ。あー。はは……」

「（ぼそつと。↓）ハダカ……かつこいい。想像以上だあ……」

「——うっ？ ううん？ なんでもっ、なんでもないよっ？」

「こっ、これタオルっ。汗拭いて待っててっ」

まつり、あなたにタオルを渡す手を返して、ワイシャツとTシャツを受け取り、背を向けながら立ち上がってシャツをハンガーに通し、部屋の隅に吊るす。

——正面『中、背向け』

「（胸の動悸を隠すように、説明がましく。↓）最初に脱がせたズボンとパンツも干しちゃうねっ？ 無香料の消臭除菌スプレーも忘れずシュッシューっ……」

まつり、干し終わって、どきまぎ、そろそろと、元の差し向かいの位置に戻って、座る。

——正面『近』

「（可愛らしく固唾を呑む音。↓）こくん……み、見抜き……いいかな？」

「（急に弱々しくへなへなど。↓）だ、だから見抜き、見抜きだよ……その、裸が凄く、思ってたよりずっとかつこよくて……エッチだから。視姦したいって……おかずにさせて欲しいなって……あ、あはは……今更なんでこんなにドキドキしてるんだろ？ さっき、おちんぼ亀頭を責め続ける所とか、甘出し射精までばっちり、観たのに……」

「（自分に言い聞かせる言い訳のように。↓）……なんだか暑くなってきちゃったっ。ぼくのセーラーもブラウスも汗びっしょりだし……脱いじゃうねっ」

ばっさりばさばさと、やけくそのような素早さでスカーフを払い、セーラー服をまくって脱ぎ、インナーブラウスのボタンを外してこれも脱ぎ捨て、ブラジャーの背中のホックに指をかけた所で、

「……あとはブラだけ。だけど……」

まつり、ふと思ひ詰めたように、シリアスに。

「……おっぱい。触ってみたいって、思う？」

あなたは如何なる答えを返すだろうか。

まつり、返事を待つことなく、勇気と性欲を奮わせて、気丈に、挑発するように。

「でも、駄目だよ……？」

「ぼくたちこれから、小さい頃みたいにふたりともはだかんぼで、小さい子が絶対しないようなエグイ相互見抜きで甘出し射精、続けちゃうんだから。おさわりは、厳禁、だよ？」

まつり、パッとブラジャーを払い、一糸まとわぬ裸体を、震える胸を曝け出す。

「スポブラ、取っちゃったあ……♡ 全裸、お揃いだねっ？」

「ほらほら、幼馴染みの生おっぱいだよー？ 両腕で抱えて持ち上げちゃったりして……うわー、そんなに目をまん丸にして、かぶりつくみたいに見ちゃうんだ。赤ちゃんみたい

「……もしかして、ぼくのおっぱいを妄想して、おかずにして、オナニー………したことある?」
あなたは、如何なる答えを返すだろうか。

「……（寂しさが差す）本当に、どうしてこんなに大きくなっちゃったんだろう……昔は
ぼくたち、カエルさんの兄弟みたいにツルペタで、おんなじような体だったのに……」

「おっぱいだけじゃなくて、フトモモも、おしりも大きく、丸くなっちゃって……もう、
ぼく、可愛いカエルさんじゃなくなっちゃったよ……」

「一緒だねって、言ってくれたのに……」

「ぼくだけ、メスになっちゃう……（寂しさを意識して切り替える。↓）けど、さ?」

まつり、不思議な覚悟、またはおぼろげな思想のある言葉を紡ぐ。

「こんな立派なおちんぼつけたメスもないよね?」

「おっぱいとおちんぼの両方で欲情煽っちゃうのは、ふたなりさんだからできることだし」
「おちんぼオナニーで善がかり狂ってるぼくをおかずにしてくれるのは、オスのオナニーっ
て、いえるのかな?」

「誰の中にもオスとメスがいたりして、その両方は淫らに、浅ましく、自分がどちらでも
いいから、ただただ一生懸命気持ちよくなりたくて、自分に都合のいいようにその時々で
気軽にスイッチ切り替えちゃうとしたら……とてもエロくて、素敵なことだと思わない?」
「ぼくたちの気持ちいいオナニーは、ぼくたちが探して、ぼくたちが自由に決めるんだよ」
「そのオナニーが、オスでも、メスでも、何だって構わない……気持ちよくて溶けちゃい
そうな、甘々の一瞬一瞬だけが、真実」

「まあ、要するにさ……（台詞のとおり、開き直って、覚悟と元気がいっぱいになる。↓）
開き直って、おちんぼと、オナホで全てを決めようってことで!」

「ほおら♡ オナホ出して♡ ローション足してあげる♡ ちゅうつと少しだけ、潤うるおす
程度で充分……拝むみたいに潰して揉んで、ローションをよく馴染ませたら……」

再びの、儀式のような亀頭オナニーのセットアップ。

「三度目から先の甘出し射精と一緒に、探しに行こうよ……挿入……うお……ほああ♡」

ぶるぶる、と亀頭感覚でまつりが震える。

「やっぱりっ……本イキしてないから、おちんぼいききたがっちゃって、気持ちいいよおつ、
射精したいよおつて、快感の信号、体中にビロビロ送信しちゃうてる感じ……♡」

「ふふふっ♡ 絶頂に必死なおちんぼ、亀頭責めで欺あざむいちゃうよっ♡」

「そおれっ、くりくりっ、おほーっ♡ くーりくり……おおお……♡」

「バグるっ♡ 気持ちいいのに射精が遠くてバグっちゃう♡ 性をバグらせちゃおっ♡
おかしな快感の信号垂れ流してお脳をお花畑にしーちゃおっ、おっ、おっ、おほおっ♡」

「ふふっ♡ おちんぼまたご立派勃起してきたよっ♡ おちんぼくりくりしながらおっぱ
いぶるぶる揺らしてる、わけわかんない生き物の淫らかな姿で興奮してくれてるんだー♡」

「ねねね、お願ねがあゝい♡ 浅ましきふたなりおちんぼ様がお願いしちゃうんだけどおゝ
いいかな? いいよね? ハイ了承♡ お願い聞いて聞いて♡」

「……乳首オナニー、してみせてよ♡」

「だって？ オナホを回してる反対の手が遊んでるよね？」

「男の子のお♡ カッコいい胸板に♡ ポチっつついてる可愛い乳首さん♡」

「いつぼくをいじってくれるの？ ……ってえ、ぷっくり勃起して待ってるんだよ♡」

「きっと、男の子でも、乳首オナニ、気持ちいいんだよお？」

「ほーらっ♡ ちくにーっ♡ ちーくにーっ♡」

「ちくにー気持ちよくなれるようにい…：ぼくも、手伝ってあげるよ♡」

まつり、不意に顔を耳元に寄せて、囁く。乳首責め煽り、開始。

——右、『至近』有声音囁き。

「……かりっ♡」

「かり♡ かりっ♡」

「ぼくの声に合わせてえ、乳首をお……かりっ♡」

「爪の先で、乳首に触るか触らないか、ぐらいいいんだってえ……かりかりっ♡」

「かりかりかりかりかりっ♡」

「こりこりこりこり、くりっ♡」

「そうそう、いじってイジって♡ おちんぽも乳首も、素直が一番だよ♡ つんつんっ♡」

「……（乳首に息を吹きかけるつもりで、耳に吐息）ふう……♡」

「乳首に息吹きかけられたらあ、気持ちよさそうって思わない？……（エアリーに、ソフトに、長いそよ風のように）ふう……♡」

「セックスならあ……べろべろーお……って、乳首舐めたりもするのかなあ？」

「（耳元で舐め煽り）べろべろべろべろ……れろれろれろれろれろ……（キス音。↓）

ちゅっ♡ ちゅーっ♡」

まつり、顔を引いて、満足そうにあなたに微笑む。

——正面、『至近』

「わあ……すっごい、気持ちよさそう♡」

「（註、まつりは乳首刺激をあまりしたことがない、という伏線。今までとは異なる、伝聞による発言。↓）乳首の刺激って、前立腺に響くって、言うよね？」

「ぼくが何も言わなくても、指が止められなくなってるし♡」

「おしっこ筋肉は常に脱力、前立腺ノーガードだと、もっと気持ちいい筈だよ♡」

「すこお、かわいいから、もっとお耳を、かりかり、いじめてあげるよ……♡」

まつり、再びあなたの耳元に唇を寄せる。

——左、『至近』有声音囁き。

「かり、かり、かり、かり♡」

「かりかり、かり、かりかりかりかり、かりっ♡」

「指でかるーく、叩いてみようか♡ とんとんっ♡ とんとんとんとん♡」

「それからあ、指の腹で、さすっちゃうの……さら、さら、さら、さらさら……♡」

「（不意打ちで吐息）ふうう……♡」

「さら、さら、さら、さら……（吐息）ふうう……♡」

「はい、お次はあ……とんとんとん♡」
「指で摘まんでも大丈夫かな？　くりっ♡」
「摘まんで甘く押し潰すように……きゅーっ♡　きゅっ♡　きゅーっ♡　きゅっ♡」
「はあ……甘勃起した乳首、舐めてあげたいな……ぺろぺろぺろ、ちゅ♡　ちゅっ♡」
「（不意打ち吐息）ふう~~~~♡」
「かりかり♡　基本はかりかり♡　触るか触らないかで、かりかりかりかり♡」
「……っん、っん♡」

まつり、とても満ち足りた顔を引いて、あなたを見る。

——正面『近』

「あああ……素敵だよお。ほんとう……本当に、可愛いよお……ぎゅうううって、抱きしめてあげたくなっちゃうよお……」

「乳首オナニーで気持ちよさそうな可愛いトロ顔、見抜きしちゃうよお♡　ぼくも亀頭オナホ回転はかどっっちゃう……（下腹部内臓の違和感を捕捉する。↓）けど、なんだろう？」

まつり、下腹部から堰を切ったように溢れてくる多幸福感に酔い。

「なんだか、お腹の奥が……熱い……♡」

「おかしいな……なんでだろ？　お腹から、しあわせがふわふわ、とろとろ、ゆるゆる、溢れてくる……（その感覚の正体に気付き、でも抗えず。↓）……あ♡」

「あー♡　これ、だめなやつだあ♡　しあわせだから逃げられないやつだ♡……内臓が、しあわせを分泌ぶんひつしちゃってる……はわああ♡　幼馴染みの裸とメス顔、効きすぎだよお♡」

まつり、多幸感でとろけた目で、あなたの目を覗き込んでいる。

「ね？　乳首いじって、メスになっちゃうの、気持ちいいんだよね？」

「男の子って、メスの内臓を持ってない筈なのに、どうして、ふわふわとろとろの顔して、メスのしあわせな快感を味わえるんだろう？」

「前立腺のせい、かな？」

「もし、男の子でもメスになっちゃうの、気持ちいいなら、ぼく……ぼくもね？」

まつり、自分では決めかねて、あなたに訊たずねている。

「ぼくも、メスになっちゃっても、いいのかな？」

まつり、とろけた視線を伏せて、内心を打ち明ける。

「……ぼく、ぼくはね？　乳首と……（言いよどむのは、それを畏れているから。↓）おまんこ、あんまり触ったこと、ないんだ」

「メスになっちゃいそうで、怖くて……オナニーの時、触らないようにしてたんだ」

「ぼくが気持ちいいのは、おちんぼだけだって、そう思ってた。思おうとしてた」

「おちんぼ突っ込んだり、舐められたり……しゃぶったりする妄想でオナニーしてた」

「おちんぼの快感を、もっともっと高めたくて……おちんぼオナニーを開発してたんだ」

「……でも、お腹の奥からメスが、もう来てる」

「もう逃げられなくなっちゃった……体とキモチが、メスになっちゃってる、う……♡」

まつり、多幸感に耐えて、しかしその感覚に着々と侵略され、声が震えるほど、か細い。

「そうだよお。火がついちゃったのは、子宮、だよお……♡」

「メス顔みせつけてくるからあ……乳首オナニーでトロトロになってるのがあんまりにもかわいいからあ、ぼくの子宮が目覚めちゃったんだよお」

「乳首イジって、煽ったのぼくだけだよ、そんなにメス顔しなくたっていいんじゃないのかなあ？ ……あー、でも、でも♡ やめないで♡ 乳首オナニーと亀頭オナニーの両方を続けて♡ メス顔、ぼくのオナニーのおかずにさせて……♡」

「ぼくも乳首いじりたい、乳首オナニーしたい、おんなじメス顔したい……ううん？ どっちがエロいメスなのか、理解^{わか}らせてやりたいって、お腹の奥で子宮が騒いでるのお」

まつり、胸が甘くなると同時に、心細くなっていく。

「乳首触るの、怖いよ……戻れなくなっちゃうかもしれないからあ……」

「ぼくたち、楽しくおちんぼオナニー見せ合いつこしてたのに、どうして、体がメスになれって疼くんだろう……どうしたらいいのかな？」

まつり、自分の言葉に追い詰められていく。

「ぼく、おちんぼで遊ぶよりも、メスになった方が、いいのかな……？」

あなた、不意に、まつりの耳に顔を寄せる。
まつり、勿論困惑。

——右『近々至近』

「えっ？ あ、ちよつと、えと……ふえっ？」

あなた、まつりに囁き声で乳首責め煽りを開始する。以後、≡内はあなたの声。
《かりっ♡》

——右『至近』

「(まつり、体が跳ねる)——ひうっ!？」

《かり、かり、かり、かりっ♡》

「ちよつちよつと待って、まってっ……♡」

《くり、くり、くり♡》

「やめっやめてっ♡ ぼくのお耳をいじめないでっ♡」

《……(吐息、エアリーだけど少しだけ力強い)ふうううう……♡》

「はあああ……ん♡ だ、めえ……乳首、触りたくなっちゃうう、から、あ……♡」

《ぺろぺろ……れろれろれろれろれろ……ちゅっちゅっ♡》

「ああっそっ……そんなんっ……ちゅば音なんて囁かれたらあっ♡ 乳首じゃなくてフェラ

チオされてる気になっちゃうううう♡ ぼくのおちんぽ啜えてもおいしくないよぉ♡

《あなた、火がついたように水音を加速させ、まつりをいじめてしましましょう》れろれろおおおつれろっ……じゅじゅじゅっ♡……れええろおおおオオオん……♡》

「あっ♡ あ、あー……おおっ♡……（オホ声大爆発。↓）ほおおっおおっおおおおほおおーっ♡」

あなた、まつりの耳元から顔を引き、満足そうに薄く笑う。
まつり、あふふと、息を乱して。

——正面、『近』

「はっ♡……はあっ……はーっ……すっ好きィ♡ お耳イジメられるの、好きいい♡」

「こっこれもう、セックス……セックスと一緒にじゃないかなあっ？」

「ぼくっ……さっきからこんなアブないことしてたの……？」

「メスになってもっ……おちんぽ気持ちいいとか、ぼくの体おかしいのかなあっ」

まつり、あなたの深い笑みに氣勢を吞まれている。

「悪い顔……時々、そう言う顔するよね？ 凄く、えっちで……カッコいい顔」

あなた、虚空に舌を伸ばしてレロレロと口唇愛撫煽りの構えを見せて挑発する。

《くああ……♡ れろれろれろおくん♡……ふああ……はーっ♡ はーっ♡ えうー♡》

「だっ……だめだよおっ♡ 男の子がそんな優しいフェラ顔しちゃいけないよおっ♡」

《どうして？ ……ぷちゅっ♡ ちゅちゅちゅ♡ れろれろれろお……ん♡》

「ずっとして欲しかったけどおっ♡ 幼馴染みにおちんぽしゃぶって欲しかったの本当なんだけどおおっ♡」

《うれしい♡ れえっ♡ はむはむはむはむ……ちゅぴっ♡ ちゅうう……♡》

「そんな優しい目で変態性欲許されちゃったら、ぼくっ……ぼく……（まつり、追い詰められてなかなば、悲鳴のように、なかなば、蕩けて）もう逃げられなくなっちゃうよおっ♡」

あなた、まつりが吐露した本心に満足して、煽りをストップ。まつりを見つめる。

《……ちゅぴっ♡》

まつり、あなたのキス音にびくんと反応。

「はうっ♡」

まつり、あなたの視線に、目と心が、吸い寄せられる。

「……どうして……どうしてそんなに、優しい目……なんだよお……」

「（見つめ合っていることが恥ずかしいのか、少し視線を俯けるように）……ま、まあ、優しいって言っても、すっごくえっちな目してるのは、そうなんだけど……っ」

「（再び、視線をあなたの目に合わせる）……ぼくが、逃げてるから、煽ったんだよね」

「ぼくたちだけの気持ちいいオナニーを探そうって、ぼくが言ったのに。オスでもメスでもどっちでも良いから、一番気持ちいいオナニーを探したいのに」

「ぼくが、メスになることを怖がってたら、気持ちいいオナニーが逃げちゃうよね」

「今度はぼくが消極的になってた……ごめんね……お返し、させてよ」

「ぼくのお願ひ聞いてくれて、可愛い可愛い、世界中でたったひとつのメス顔……見せてくれたんだもん。ぼくもおんなじ、メス顔でお返し、したいよ」

「メス顔だけじゃなくて、メス喘ぎとか、しちゃうかもしれないけど……」

「それどころか……あらぬことを口走っちゃったりとか、するかもだけど……」

「……絶対、子宮に負けたくない」

「お腹の底からしあわせが止まらなくて、溢れちゃってるけど……ぼくは子宮に負けない」

「だから、煽って……耳元で、かりかり……って」

「ぼくがどんなに乱れちゃっても、追い詰めることになっても、かりかり、やめないで」

「ぼくのメスを目覚めさせて」

「ぼくといっしょに、メスになって……」

「男の子でも、ふたなりさんでも、乳首オナニーでメスになれるんだから」

「メスの世界と一緒に、気持ちいいオナニー探して……一緒に戻るんだって、約束して♡」

まつり、あなたの耳に顔を寄せる。

あなた、まつりの耳に顔を寄せる。

じゃれ合って尾を追いかけて回る二匹の子犬のように、顔を寄せ合う。

まつり、湿度の高い、潤んだ吐息。

——左、『至近』有声音囁き。

「……はああああ……はああーっ♡……」

「すっごい、怖くて……ドキドキする、う……」

「はーっ♡……スるよ……ヤッちゃうよ♡ おちんぼ、オナホくるくる、回し続けて……」

「はーっ♡」

「……はーっ♡」

「…………囁いて♡」

耳元で囁きあう。

「——かりっ♡」

《——かりっ♡》

まつり、あなたの乳首責め煽りの声に応じて乳首を掻き、即、悶絶。負けないと言って勝てるエロ展開はありえないのである。

——左、『至近』

「(声にならない悶絶、糸のように細い高音。↓)~~~~~っ♡♡」

まつり、見る影もなくアへってしまいます。即堕ちとは正にこれ。

「らっ……らめへえええ♡ 乳首いい、しゅごしゅぎりゅうううっ♡」

「こんなふうになっちゃうのが怖かったんらよおお♡」

「指がああ、かりかりかりってええ、止まらないよおおおっ♡」

《かりかりかり……かりっ♡(以後、まつりの台詞にオーバーラップ、次の台詞まで、かりかり煽りをアドリブで継続)》

「ああ♡ あっ……ああああんっ♡ はああ……あーっ♡ 続けてえええっかりかり
続けてえええええーっ♡」

「怖いのにちくにー続けちゃう、内臓からとくとく溢れるしあわせてフヤけちゃううっ♡」

「かり、かりっ♡……ミユううう♡……かりかり、かり♡」

「乳首気持ちいいだけじゃなくてえ、子宮がきゅんきゅんっ、きゅんきゅんっってええ♡」

「繋がってる♡ はっきり理解る♡ 乳首と子宮が繋がってるーっ♡」

「メス堕ちいい♡ ぼくうう、メス堕ちしちゃうううっ♡」

「らめえ♡ ああっ♡ あああっ♡ 煽ってられない……♡ 感じてトロけちゃうの
に一生懸命になっちゃってるうう……あーっ♡ あんっ♡ あああんっ♡」

「負けっ♡ 負けちゃいましたあああっ♡ ぼくううう♡ 熱うううい子宮にいい♡

屈服しちゃってえええっ♡ んあゝっ♡ ただのメスになっちゃいましたあああっ♡」

「発情した子宮に勝てなかったよおおおっ♡」

「なじってっ♡ いじめてっ♡ 見下げ果ててっ♡ ド淫乱子宮に負けちゃったふたなり

雑魚ちんぽおおっ♡ ぼくを叱ってええええっ♡」

奮起せよ男の子、今こそ救いの手を伸べ、庇護^{まも}る時！(かりかり煽りアドリブここまで)

《内台詞、男の子の筈なんですがとても母性的、庇護者の声。ふんわり甘々でどうぞ。

《がんばれっ♡》

「はうっ♡」

《つよつよおちんぼ、まけないでっ♡》

「ちがっ♡ ちがうもんっ♡ もうとつくに負けちゃってるんだもんっ♡」

《いいこっ♡ いいこっ♡……つよいこ♡ いいこっ♡》

「——いいこだっていうなら、キスしてっ♡ ぼくの亀頭にチューしてえっ♡」

《——(エグい吸引音をキめましょう。↓)じゅぞぞぞぞぞぞぞぞぞっ♡》

まつり、のけぞるようにあなたの耳元から顔を引く。

——左、『至近〜近』

「ふおおおっ♡ おおおおおほーっ♡」

まつり、乳首経由で子宮、亀頭経由で前立腺の、両方をぐちゃぐちゃに掻き回した結果、表情もぐちゃぐちゃのどろどろ、笑いながら涙を流している。

——正面、『近』

「ごめっごめんなさいっ♡ 見ないでっ♡ 絶対だらないアへ顔してるからあっ♡」
「嫌やらあ♡ やーらああ♡ 見ないでええ、見ないれえーっ♡」
「メス堕ちしたぼくをおかずにおちんぼ龟头回転攻撃いい、激しくしないれえーっ♡」
「ああっ♡ ああん♡ ああああっ♡ んあーっ♡」
「らめええ♡ メス喘ぎおかずにされちゃうとお、子宮がセックス望んじやうううっ♡」
「メスに発情しないれええっ♡ おちんぼっ♡ ぼくのおちんぼ見てっほらあっ♡ ぼくもおちんぼ気持ちいいよおおっ♡ 子宮と前立腺のふたつが燃えちゃってるよおおっ♡」
「乳首オナニー気持ちいいおおっ♡ 男の子みたいにちくにー気持ちいいんだよおおっ♡」
「おんなじだって言ってるえっ♡ 乳首気持ちいいのおんなじだってえっ♡」
「ふたり一緒におんなじメス堕ち顔晒して、アへってるザコメスおかずにしあつて、おちんぼ一緒にくりくり回して気持ちくなってるぼくたち一緒だって、言ってるよおおっ♡」

まつり、懺悔と告解、または告白に突入する。

「あーっ♡ あああーっ♡ あーっ♡ ごめんなさい、ごべんなさいいいっ♡」
「おちんぼついてるふたなりさんだからってええ、おまんこちつとも触らなくてごめんなさいいいっ♡」

「判ってたあっ♡ ホントは全部判ってたああっ♡ ぼくはおちんぼとおまんこ両方持ってるふたなりさんだってこと、判ってたんだよおおおっ♡」

「メスになることが怖くて逃げ回ってたっ♡ 男の子に懂れたんだっ♡」

「昔からずっと一緒にいてくれた、たった一人の幼馴染のようにいい、かつこよくて、やさしくて、時々すっこく、横顔がえっちな、男の子とおんなじになりたいってええっ♡」

「幼馴染みの男の子がきつと、きつとそうしてくれるように、優しく抱きしめてあげたい」
「優しくねっとり激しく、れろおおっ、おちんぼしゃぶしゃぶしてあげたいいっ♡」

「熱うい精液を顔で受け止めたい、ぼくもどろどろの精液を顔にかけてあげたいいっ♡」

「ドン引きしてよおおっ♡ ぼくずっと、幼馴染みにフェラチオして欲しかったよおおっ♡」

「幼馴染みのお♡ しかも男の子にいいっ♡ おちんぼしゃぶしゃぶされたいってえっ♡」

「幼馴染みの男の子の何気ないえっちな横顔をぐっちょぐちょに汚してあげたい妄想ばんばんに高めて燃やして、少しでも多くたくさんの、夢一杯の精液を吐き出せるようにぼく、オナニーを開発したんだよおおっ♡（オホ声。↓）お、おおっ……おおおほおおっ♡」

あなた、とどめを刺しに行きましょう。まつりが望む言葉の種類はそう多くありません。

《……好き？》

——正面、『至近』

「（即答）好きいいいっ♡」

《ぼくのこと？》

「大い好きいいいーっ♡」

《大好きなぼくを想って、いききたい？》

「いきたいいっ♡ いきたい、いぎだい、おちんぼいぎだいいいいっ♡」

《絶頂懇願、可愛い♡——でも、いくのは、駄あ目♡》

——正面、『至近』近

「ひいっ♡ 待って、まさか待って、乳首も亀頭もつらいんだからっちょっどおおっ♡」

あなた、甘々とサディスティックに宣告を、カウントダウンを開始する。

《じゅうつ♡》

——正面、『近』

「てっ、テンカウントおおっ？ 遠い、我慢する秒数が長すぎるよおおっ♡」

《きゅううつ♡》

「お願いいいっ♡ もう我慢できないよっ♡ 本イキしたいいい♡ 楽になりたいっ♡」

《はああああちっ♡》

「ダメえええっ？ なんでえええっ♡」

《なあああああああなっ♡》

「もおおおっ♡ それ絶対、楽しんでる顔だよええっ♡ ぼくがいきたくてもいけないで、狂っちゃいそうになってるのがおちんぽに響くって、そういう顔してるよねーっ♡」

《ろおおおおおおくっ♡》

「変態っ♡ 変態変態変態っ♡ 大好きっ♡ 幼馴染みの変態でぼくしあわせだよおおっ♡」

《……こっ♡》

「乳首かりかりいじめてっ亀頭くるくる回してっ♡ 子宮きゅんきゅん、前立腺びくびく痙攣させてる、わけわかんない生き物に興奮してくれてる変態さんが大好きいいーっ！」

《よ……おおん♡》

「正気に戻りたくないっ♡ ずっとえっちに狂ってたい♡ 賢者タイムなんて大嫌い♡」

《さあああんっ♡》

「甘出しだったら♡ 甘出し射精ならっ♡ ぼくたちずっと好き好きしてられる♡ ぼくたちずっと変態でいられるよーっ♡」

《にいいいっ♡》

「いきそうになってる大好きな顔をずっと夢に見てたっ♡ 妄想してたっ♡ 何度精液ぶっつけたかわかんないよーっ！」

《いーいーいーいー……ちっ♡》

「好き、好き、好き好き好き好きいいいっ♡ ずっと昔から大好きだよおおーっ♡」

《ゼロっ♡》

——正面、『至近』

「——ほおおおっ♡」

《両手を離そっ♡》

「ぐうふっ、ううううっ……っ！」

《いくなっ♡》

「……ふー……っ♡」

《いくなっ♡》

「……ふーっ♡」

《すんどめっ♡》

「……おおっ……♡」

《おもらしっ♡》

「……ああ、あ……」

《精子、どろんどろおん♡》

「は、あ、う……♡」

《尿道口、膨らんじゃう♡》

「はっ……は……はっ……は……」

《気持ちいいねえ♡ 甘出し、気持ちいいねえ……♡》

「……はあ、はあああ……♡」

トラック4——シルアソビ

まつり、三度の甘出し射精で目の焦点が定まらぬ様子だが、瞳の奥にゆらりと蠟燭の火のように、欲情が消えずに揺らめいているような……（いつから小説になったのですか？）。

——正面、『近』。

「（重ったるく、艶めいて気だるく）……精液、紙コップに出さなきゃ……」

「（ホールから男根を抜き）……んっ♡う……♡」

「（ホールから紙コップに精液を処理しつつ、どこかぼんやりと）……三度目になると汁の粘度が低くなって、ずるーんって、紙コップに落ちちゃうね……量は変わらないけど……（有無を言わさぬような上目遣いで見上げてくる）ほら、紙コップに精液、回収だよ？」

まつり、あなたのホールから精液を紙コップに受ける。

盃に血を受けるような、儀式めいた構図である。

「ふふ……いっぱい精液、出してくれて嬉しいな……」

「もうローション足さなくても、オナホの中で粘液つるつる馴染んでるから、おちんぼハメても大丈夫かな……ん（ホールを装着）……んんうう♡被せちゃったあ♡」

まつり、ぼんやりとした発情に憑かれている。手の中には紙コップ。そこに満たされた二人分の排出物を、愛おしそうにくるくると、盃の中の酒のように弄んでいる。

「ちゃぷちゃぷ……この紙コップのサイズ三オンスだから、全部で何ccかな？……ふふ♡」

「紙コップいっぱいのお汁♡カウパー。前立腺液。精囊分泌液……精子。それにローションと、オナホが削った亀頭の粘膜と……恥垢……ちんかすって言った方が、いいのかな♡」

まつり、汚言を弄したことに興奮して、くすくすと、童女のように笑う。

「くすくす♡ちんかす……ちんかすだって♡……ぼくたちのいやらしいものが、ぜーんぶ、ふるふるとろろ、紙コップで混ざり合ってる。メスを孕ませちゃう凶暴な子種汁♡」

まつり、意味ありげに笑みを浮かべる。

——右、『至近』有声音囁き。

「こんなの、おまんこに流し込んだら、一発で着床妊娠、しちゃうよねえ？」

まつり、発情と興奮に支配された壮絶な笑みで、あなたの瞬間的な危惧を見透かして。

——正面、『近』。

「今、ちよつと怯んだよね？ ぼくが何をしようとしているのかを想像しちゃった？ まさかぼくが、このたふたふの精液を、ぼくの子宮で大事大事に、蓄え込もうとしてるとか、そう考えて怖くなっちゃったのかなあ？……ふふ♡」

まつり、圧倒的な優位を取れる手段を、手の内に収めた愉悦で笑う。

「ふふふ♡……生まれてくるのは、ぼくのコピィ？」

「それとも、ぼくたち両方の、遺伝子なのかな？」

「子宮がきゅんきゅん疼くのは、精液を欲しがってるからなんだ。男の子がメスを孕ませたい欲望に突き動かされて精液を吐き出すように、メスは子宮に精液を入れない欲望に従って大好きな男の子を誘惑するんだって、今、理解^{わか}ったんだあ♡」

「ぼくたちが今、弄^{もてあそ}んでるのは、生殖行動。本能的な欲求、赤ちゃんを産みたくてたまらない、産ませたくてたまらない、ケダモノの欲望なんだって、理解^{わか}らせられちゃった♡」

まつり、ゆっくりと首を横に振る。

目を閉じて、首を横にゆるゆると、振る。

まつり、生殖欲求より、性的な興味が勝る。

「……でもね。ぼくがしたいのは、アブない遊びなんだ」

「ぼくたち、甘出し射精だけじゃなくて、メス性感にも蕩^どけちゃって、気持ちよければ何でもいいんだって、夢中になって乱れちゃってる……もっと、狂おしくありたいよ」

「ケダモノみたいに求め合うだけじゃ、全然足りない。まだまだ、遊び足りないよ」

「もっと、ぼくたち二人一緒なら、もっともっと……アブない遊び、出来るよ」

「遊びじゃなくて真剣に精液を渴望してる、ぼくをメスにしようとしてる、ふしだらで必死で、かわいいかわいいぼくの子宮には……こうしてやるのさ」

まつり、紙コップをそうすることが自然であるかのように自らの口元に運び。

「子宮が欲しがってる大切な精液……ちょーっと、味見しちゃいまーす♡」

まつり、精液を一口、含む。

まつり、精飲、開始。（註、咀嚼音は「内で」で囲み、読み易いようにピックアップ）。

——正面、『至近』

「……ん……（唇を少し開いて軽く咀嚼する）『ぐちゅっ……ぐちゅ……ぐちゅ……』」

「（口を半開きにして、精液を嚥下せずに、こぼさないように気を使いながら話す）……ならんらか、口が^{くち}つるつるしゅる……『ぐちよ、ぐちや』……そっか、こういう感じならんら、精液って……『くちやくちや、じゅる』……ああ、れも……つるつる滑^{すべ}るのは、ローションのせい？ カウパーの量が多いから？……まあ、いいや♡……（一息に精液を吞む）こくんっ♡」

まつり、粘液でぬらりとするも、精液が飲み下された口腔を見せつける。

「くああーん♡ ふあーっ♡ 精液、ちよっとだけど、飲んじやったあ♡」

——正面、『近』

「くすくす♡ ふふふ……♡ 愉快、すごく、愉快♡ ぼくをメス堕ちさせて精液すろうとしてた子宮が、お口に精液とられて悔しがってるって思うと、こんなに愉快なことはないよっ♡」

「お口と子宮は繋がってませーん、消化器じゃ妊娠できませーん、どーだ参ったかーっ♡」

「^{ナカ}腔内に射精するだけじゃなくて、精液をぶっかけたり飲ませたり、喉奥に直接流し込む場面に、狂おしいほど男の子が興奮するのって、当たり前だっと思っう？」

「大好きな顔を、唇を、体を、自分の精一杯で穢したいのは、当然だよね♡」

「妊娠目的じゃない、ただ相手の体を穢すための射精……ぼく、大好きだよ♡」

「大好きな横顔にぶっかけたいのと同じぐらい、精液で穢れたぼくを見て欲しい……どろどろに白く穢れたぼくに欲情して欲しいよ」

「大好きな幼馴染みおちんぼの精液……大好きだって気持ちに狂って吐き出したぼくの精液……混ざっちゃったふたつの大好きと精液……今日はぜーんぶ、ぼくが独り占め♡」

「欲張りでごめんね♡ ワガママでごめんね♡ ぼくを甘えん坊でいさせて、ね♡……（口を大きく開き、上を向いて。↓）くあああああゝゝん♡」

「……おっ♡ お口にいいっ……♡ ぼくたち三回分の精液、全部注いじゃうう……」

「勃起ちんぽお♡ 亀頭オナニーしてえ♡ 精飲してるぼくをおかずにしてええ♡」

「絶頂、すぐ隣にあるから、ゆっくり、ゆっくりだよ……くるくる、ゆっくり回すよ♡」

「精子飲んじゃう……お口にいらいたらいけないものののに、飲んじゃうう……♡」

「スクリューみたいに鞭毛振り回して泳いで膣内を遡行して子宮に達して卵子に突撃したい筈の、生殖の為に生まれてきた筈の、何億体もの必死で可愛いぼくたちの精子をおっ♡」

「い、た、だ、き、ま、ああああ……すうっ♡」

まつり、顔よりも高い位置に掲げた紙コップを傾け、何の躊躇もなく精液を、大きく開いた口中に注ぎ込む。

——正面、『至近』。

「（口を大きく開き、顔は口中の精液をこぼさぬようやや上向き、下向きの熱い視線が見返す、口内に精液をとるところと、少しずつ、落としながら、弄ぶように、舌で攪拌する。↓）えーう、れえええ、えおおお……れろれろれろお♡」

「（紙コップの中身を全て口内に落とし、鼻息で悦ぶ）……んふーっ♡」

「（軽く喉から息を吐いてうがい）……『がろがろがろがろ♡』」

「（口内に溜まった精液から舌を突き出し、回す）ええお？ ええええお？ れええええ♡」

「（唇をすぼめて、空気を軽く長く吸い込み精液と混ぜる、ワインのテイスティングに近い所作）『ちゅぽぽぽ♡ じゅじゅじゅじゅ……じるるるるるるる♡』」

「（口を閉じ、精液を玩弄している喜悦に浅ましく笑みを浮かべて）……んふっ♡」

「（精液を口内に留めたまま、笑う）んんふふふ♡ ふふ……ふふふふ♡」

「（一転、精液で口をすすぐ。まつりはあなたの男性器を激しく口唇愛撫しているつもり、

[illegible]

「(上を向いて口を一杯に開き、泡だらけの口内を見せつけてくる)……おああああああ」♡

「(精液を口内の舌の下に仕舞うようにして、発語する)カ、ウ、ント、じでええ？」

「5、ガ、ウン、ド……だおおお？」

「甘出し、^ふ続けよばおおお？」^の

「ゼロで飲むヴヴぶ……全部飲み込むがらあああ
 がびがびちじやいぼーじゅのびこぶろ」

「噛み、噛み♡ しちやいまーす♡」

「（口内の精液にかぶりつくように口を閉じ、咀嚼開始）はふーっつっ♡」

「閉口して咀嚼」『ごちゅごちゅごちゅごちゅごちゅ』♡

《卷一》

(開口して音を立てる咀嚼)『ぐちやぐちやぐちやぐちやぐちやぐちやぐちやぐちや』♡

《よん》

「（口をすぼめてよだれを整える。↓）『じゅじゅつ』（再び開口咀嚼）『ぐちやぐちや』♡
㊦

《ちん》

「(口を閉じバキューム系のすぼめる動作で精液を攪拌。↓)『じゅぽっじゅぽっじゅぽっ

に

「（絶頂感を捕捉し、口を閉じて呻く。↓）みゅっ♡んっ♡んんんっ♡」

《いち》

「口を閉じたまま寸止めに呻く。↓んーっ♡
んんんんんうんーっ♡」

《ぜろ》

「（鼻から息を二息吸い、精飲と甘出しに備える。↓）すふーっ♡」

《飲めつ♡》

「いっしょ♡」

《喉を鳴らして飲んでっ♡》

「くっ……くっ……」（少し喉に引っかかった。↓）んんっ、ううーっ♡」

《……美味しそう♡》

「『……んんん……んんん……』」

《精液飲んでるう……変態♡
変態幼馴染み♡……可愛い♡》

「……ふー。（開口して飲み干したことを誇示。↓）くあああああん♡ ナイナイ、しちゃったとおお？……（可愛くげっふ。↓）けふっ♡（しつこい吐息。↓）はああああ♡」

「……（痰などが引つ掛かった時のように、喉を鳴らす。↓）んんんんっ♡」

「（もう一度、可愛らしくも大きめのげっふ。↓）ん、けふうっ……はあ……はああ♡」

「泡だらけの精液だったから、げっふ出ちゃった……お行儀、悪かったかな……（あなた

の満足げな顔、優しい目に見つめられて、顔真っ赤になる。↓もお……もつと下品で、ドスケベで、胃袋から絞り出すようなげっぷなんて、まだ上手に出来ないよお……」

——正面、『近』。

「ねえ。好き……好きだよ。大好きだよ」

「好きって口にするたびに、しあわせが、甘々に、いっぱい、たくさん溢れてくる」

「ねえ。ぼく、今すつごく、しあわせだよ……でも、でもね？」

「怖いよ……なんだか、怖いんだよ」

「ぼくの、この気持ち……本当に『好き』って気持ち、なのかな？」

「それとも……『遊び』……なのかな……」

「昔からずっと、ぼくたち、何をするのも一緒に、傍にるのが自然で……ぼくはね、他人とは思ってなかったんだよ？ でも、友だちや、兄弟、家族とも違う気がしてた……」

「ぼくは、ずっと……『もう一人の自分』だって、思ってたんだ」

「小さい頃の夏休み、揃って用水路に落っこちて、一緒にシャワーを浴びた時に……おんなじだね、一緒だねって、言ってくれたあの時に、そう思うようになったんだ」

「ぼくたち、おんなじだから、一緒だから、楽しいことも嬉しいことも、泣いたり怒ったりした時も、ケンカしても、仲直りする時も……もう一人の自分だから、気持ちが手に取るように判った」

「もうひとり自分がいるから、どんなアブない遊びも怖くなかった。いつだってワクワクした。達成困難な問題を一緒にクリアするのが純粹ピュアに楽しかった……」

「いつまでも一緒に、遊んでいたいんだ。まだまだ遊び足りない、この気持ちは、好きって気持ち、なのかな？ それとも、この気持ちには別の名前が、あるのかな」

「……判らないよ。ぼくは——」

あなた、そつと、しかし有無を言わせぬタイミングで、まつりの唇を唇で、奪う。

——正面、『至近』。

「——んっ」

まつり、思わず身を引く。

「こ、らあ……キスだめ、おさわり禁止っ……おくち、精液飲んだばかりだ、よお……」

まつり、追いかけてくる唇にびくりと震えるのも一瞬、抵抗の意思はその一瞬で潰えた。

「——んっ♡……う、ん……ふあ」

まつり、呆けたように口を開けてしまい、あなたはその隙間に舌を捻じ込んでいく。

「はあう……んん……うん♡ちゅっ♡えあっ……れえええ……」

まつり、あなたの舌の愛撫に応えて舌を絡ませ合う。

ふたり、とてもディープな、初めて同士とは思えないキスを交わし合う。

ト書きなのだが敢えて述べよう、相思の恋だけがそれを成さしめる。

「ちゅっ、ちゅっ……ちゅあっ♡ れおおおお……れるおおっ……ちゅうう♡ ちゅる、ちゅる♡ れえろろろ……ちゅっ……（キスにひとまず満足、お互い離れる）ふああ♡」

まつり、泣きそうなほど潤んだ目で、あなたを見ている。

——正面『近』

「もお……ばかあ。おさわり禁止って、あれほど言ったのに……どうしてキスして欲しいって、判っちゃうんだよおっ」

まつり、身を投げるように、あなたの体に、体を預ける。

まつり、耳元で、想いのたけを囁く。

——右『至近』

「迷ってばかりでごめん、臆病でごめん、逃げてごめんね……やっぱ好きだよ。ぼくたちずっと一緒にいい、何度でも言いたいよ、好きだよ……キスでトロトロに胸が溶けちゃう理由は、オナペットってだけじゃ足りないよ、もう一人の自分とキスは出来ないよ、キスをしたいのは、大好きな人とだけだよ……お！」

トラック5——コイアソビ

前シーンの直後である。

まつり、呆然と。

——正面、『中』。

「……ルール、破っちゃったね……」

「おさわり、しちゃった時……どんなペナルティ、だったっけ？」

「しかもファーストキス奪っちゃうなんて……死刑、ではなかったと思うけど……」

まつり、ぼんやりとした瞳に、ふと、加虐的な光が僅かに、灯るように。

「……どの穴を犯すのが、具合がイイのかな？」

「それとも、犯されたい穴は、もう決まっているのかな？」

まつり、自分の暴力的な気配を、吹き消して。

「……おどかして、ごめん」

「約束、守れないや」

「罰するために……大好きな人を一方的に犯すなんて、ぼくには出来ない、よ……（まつり、急に虚脱する。瞬間的に意識を失い、すぐに復帰。↓）……あ、れ？」

「ぼく、今、座ったまま、気を失ってた？」

「……（強がる。↓）いや、違うよ。そんなことないよ。気のせい……ぜんぜん、大丈夫、平気……（と言いつつ、ひどくぼんやりと）……まだ甘出し、四回……だもん」

「……平気だってば。ぼく、一晩で八回甘出し、したことだって、あるんだよ？」

「（強がって、言わなくていいことまで口走ってしまふ。↓）ほら、クラスの古志野^{コシノ}さんと石下^{イシモト}さん……お化粧が上手で、オタクに優しいギャルって評判だよな？ 場の流れで、一緒にスマホで写真撮ってくれたんだけど、どうしてギャルのピースって、ムラってするんだらうね？ 古志野さんと石下さん、ぼくの性欲、判ったのかな？ 甘勃起しそうな熱いおちんちん、見透かしてたのかな……コピー用紙に写真をプリントアウトして、紙コップに溜めた精液べちよおって、ぶっかけたりして……あの時は狂っちゃうかと思った……」

まつり、ぼんやりと、自分の性癖に諦観し、自分を力なく、つきはなす。

「ごめん……ぼく、やっぱりおかしい……好きな人の前で、好きな人以外をおかずにしたオナニーの話なんて、最低だよな」

「許せないって思うよね？」

「罰を受けるのは、犯されるべきは、ぼくの方だよ」

「ほら、高めてよ、性欲。ぼくを滅茶苦茶にして……（セックスを忌避するわけではない。しかし、これまであなたとふたりで積み上げた手段、これまでの相互オナニーを破棄することが、悲しい。↓）……好きな人に貪^{むさぼ}られるなら……ぼく……」

あなた、まつりを掻き抱く。

まつり、力なく人形のように抱かれる様は、実際の体格以下のか細さである。
まつり、喜ばしいのに空虚。

——右『至近』

「……あったかい」

「ぼく、最低なのに……抱きしめてくれたの、嬉しいよ……押し倒してよ」

「お願い……オナニーに狂ってるぼくを罰して……犯してよ……」

あなた、まつりの耳元に、囁く。

《甘出し射精、ぼくをおかずにした時は、何回まで？》

まつり、急な問いかけに、反射のように、正直に自白。

「……三回」

あなた、いかにも不満そうに。

《ふうん？》

「あ……いや、その……（混乱、うわ言のように。↓）違う、違うんだ……六回、六回……
……うう嘘です、うそ……三回、本当に三回が今までの最高記録で……（あなたがつれなく、
抱きしめた腕を解いて、遠ざかるので、心細さが極まってしまつて。右『近』↓）……だ
つて、だつて聞いて、お願い……（正面、『中』↓）エロ可愛いギャルよりもずっとずつと
好きな本当なんだよ……っ！」

あなた、まつりのいう所の、優しくて、かつこよくて、とてもエロい顔をして見つめる。

あなた、まるで答弁を待つように、無言でまつりを見つめている。

まつり、見捨てられるのか許されるのか、判らなくなつて、殆ど泣きそうになつて。

——正面、『中』。

「その顔、だよお……優しくて、かつこよくて、えっちな顔をおかずにしてたんだよ」

「何度も何度も、たったひとりのぼくの、ぼくだけの幼馴染みの横顔を思い出して、オナ
ニーするのに……頑張れなくて、すぐにびゅーびゅー精液出ちゃうんだよお……っ」

「理由、今なら判るよ……大好きな人をおかずにして、我慢なんて効く訳ないんだよ……」

「一番じゃなくてごめん……大好きなのに、一番のおかずに出来なくて、ごめん……」

あなた、まつりの頭を、愛しく、撫でる。

《よしよし♡ なでなで♡ よしよしよーし♡》

——正面、『近』。

「（半べそで。↓）くふうううっ……ぼくの頭なんて撫でたら駄目だよお……」

《今日は四回も甘出ししちゃった、三回の壁を越えちゃった、がんばった♡ いいこ♡
「ううう……っ。どうして、犯してくれないの？ ぼくのこと、嫌いになっちゃったのっ？」

あなた、優しく、笑顔で、悪魔のようなことを言う。

《まだ、絶頂してないからだよ》

《こんなにも甘くて熱くて溶けちゃうオナニーを、途中で投げ出すなんて許されないよ》
《オナニーを愛していることも、キスでしあわせになることも、罪じゃない。罰としてのセックスなんて、ぼくたち二人が望まない》

《ぼくたちがしてるのは、ファーストキスで終わるような、簡単なゲームじゃないよ》
《ぼくたちだけのオナニーを続けよう》

《今日の甘出し射精は、九回まで……だよ♡》

まつり、溜めた涙と一緒に瞳がこぼれ落ちそうなほど、目を見開き。

「……続けて、いいの？ オナニーを……甘出し射精を……？」

あなた、まつりが先刻言ったことを、そのまま返す。

《ぼくたちの気持ちいいことは、ぼくたちが自由に決めるんだよ？》

あなた、かつてまつりにそうしたように再び、まつりの本当の姿を祝福し、受け容れる。

《オナニーに狂ってるの、すっごく、楽しそうで、えっちで、可愛いよ》

《だから、もっと狂って。もっと狂わせて。あと五回……》

「あと、五回……？ こんな状態から……ぼくたちふたりで——最高記録を、作る？」

まつり、目にかすかな光が差す。

まつり、小さく笑んだ拍子に零れた涙は、まるで天気雨のように透明であろう。

「……うん。一緒にいい」

「二人一緒にオナニーを、ぼくたち最高のオナニーに、したい」

まつり、体力が失われた肉体に、言葉を接ぐたびに勇気が満ちていく。

「もっと、甘出し射精したい。もっともっと、一緒に気持ちよく、になりたい……」

まつり、虚ろな瞳に、硬く鋭く脆い意思が、輝き始める。

「証明したい。大好きが一番、気持ちいいって。阿佐日まつりは、初恋をおかずにして、最高に気持ちいい甘出しオナニーが出来る下変態なんだって、実証したいよ」

「体も意識も限界で……こうしてる今も、気を抜くと落ちちゃいそうなんだけど……」

「……四回も、ゆっくり丁寧に焦らされて、射精感が高止まりしてる。ちょっと触っただけでも射精しそう……だから、速攻の寸止め甘出し五連発が、出来るかも知れない……途中で気絶、しちゃうかも知れない……だけど……」

あなたとまつり、心はひとつ。

《最高にアブない遊びをしよう》

「今までで一番の、アブない遊びにしよう」

まつりとあなた、見つめ合う。

「セックスする時みたいにふたりとも裸で……手を伸ばせば肌に触れるのに……抱き合うことだって、キスだって、恋人同士のセックスだって、出来るのに……」

「大好きな顔も、えっちな裸も、しゃぶりたいおちんぽも……全部、おかずにしちゃうよ?」

「ぼくたち二人だけの、セックスよりもエグくて、甘い甘いオナニ、しちゃうよ……」♡

右、『至近』有声音囁き。

まつり、囁くたびに興奮が高まる、生じる熱が体の芯を焼く。

「好き好き、好き……好き好き好き好き……好きい……大好きい……」♡

まつり、恋を囁くには余りにも淫靡。肉欲と恋慕を熱に溶かして混ぜ合わせた声で。

「小さい頃からずっと一緒に、嬉しくて楽しくて、眩しくて……キラキラの思い出は全部、愛しい気持ちは全部、このオナニーのために積み上げてきたんだあああ♡」

「はあああ……♡ オナホ回したいい……いいよね、いいよね？ 初恋をおかずにする最低オナニー始めちゃっても、いいよね？」

「せーので、一緒に始めよう？　せーので、最低にふたりで堕ちちやおう？」

「……せーので、オナホくるくる回して狂っちゃおう?」

まつり、顔を引き、あなたを正面から視界に捉える。

まつり、微笑んで躊躇いなく、その句を放つ。

——正面『近』。

「——せーのっ♡」

まつり、せーのとホールを回した刹那、ガクリとおどがいを上げて、のけぞり悶絶。

「…………お……お……おお……お~~~~つ」

「はっ……が……あゝゝゝつ、だめえええあああ……っつ」

「最初っから、ああ……クライマックスう、うううう……おおおお~~~~~つつつ」

「きつきもつ気持ちっ……良すぎるいい♡」

「性感、高止まりいい……おおお……ちよつとごすただけで……おおお……」♡

「人間としてっ……出しちゃいけない声っ……おっ？ おおお……っ」♡

「こんな汚物みたいなっ声え……ケダモノにも失礼だよおお……おろろろっつ♡」

「バケモノっ♡
ぼくたち……バケモノになつてゐるううううううううおおくっ♡」

「射精いい、くうおおおお……ががつがまんつでぎないいいいいつ♡」

[illegible]

「ちちちチビるううううっ……精液いいいい……チビっちゃううううお、お、おおゝゝっ♡」

《——ストップ♡》

「……はっ♡ はっ……はああああ……♡」

「あ……甘出し……精液甘出し……♡」

「で……出来たあ……これで甘出し射精、五回目え……？」

《——じゃあ、再開っ♡》

「おほ~~~~~♡」

「間髪……入れないいいなんてえ……キチクううううっ♡」

「キチクのくせにいい~~~~そっちもアヘアへえっアへ顔してるおほ~~~~？」

「余裕なんてないくせにいい♡ ぼくを攻める余裕なんてないくせにいい♡」

「人間の尊厳剥ぎ散らかしてええっ、快楽物質分泌^{かいらくぶつしつぶんひつムサホ}動物以下のバケモノになってるぼく^{ドーブツ}の顔とおお♡ おかずにしてるんだよねええっ？」

「いいこと教えてあげるうううっ♡ おんなじ顔っ♡ ぼくもおかずにしてるお~~~~♡」

「気持ち善^ヨがってるう~~~~幼馴染みの顔が最ツ高のおかずうううっ♡」

「オナニー狂^{マドバシ}ってる初恋幼馴染みで精液^{ホトバシ}迸るうううう~~~~♡」

「ももももおおっ駄目ええあああ~~~~精液いい出え~~~~♡」

《——ストお~~~~ツプ♡》

「——ふうううっ♡ はあっ、はーっ♡ はああーっ♡」

「……なっ……何回だっけ……六回目、甘出し成功……だっけ？」

「精液、チビってる感じはするの……もうぜんぜん量が出てないよ……？」

「オナ禁でパンパンに溜めてた精液……もう、売り切れ間近あ……？」

「もう、精液、紙コップに捨てなくても……いいかも」

「滑る方がマイルド……っていうか、ぬるぬるのお口にばっくり、ホールドされてるみたいって、いうか……」

《すかさず、あなたは疑似フェラで不意打ち。↓ちゅああ……れえろおお……んっ♡》

「——っ！ お~~~~~お~~~~~♡」

「……いきなりエアフェラ……スるとかーっ♡」

「エロ過ぎて反射でオナホ回しちゃったよおっ……ちよつまで待てまで、待つて——」

《くうああ~~~~♡ れえっ♡ れろれろれろれろお~~~~んっ♡》

「お~~~~~♡ だめだめだめええーっ♡ ぼくがしゃぶってあげるのーっ♡」

「好き好きおちんぼ様にご奉仕するのはぼくなのおっ♡」

「一日中でも亀頭がふやけて性感蕩けてもいちゃいちゃイチャイチャ、ずーっとずっと、お口でおちんぼ様愛してあげたいのーっ♡ 男の子がふたなりおちんぼフェラするのっ、

禁止いいいゝゝゝっ♡」

《ちゅちゅっ♡　じゅじゅちゅーっ♡　ちゅぼっちゅぼっちゅぼっ♡》
（あなたの疑似フェラ音、アドリブ開始。ねっとりと責めまぐるように）

「ほおおおおゝゝゝゝゝゝゝっ♡」

「ごめつごめんなさいゝゝゝっ♡　ずっと幼馴染みのっ、しかも男の子にっ♡　ふたなりおちんぼっ♡　フェラチオして欲しかったんですううゝゝゝゝゝゝっ♡」

「せつくすっ♡　セックスっ♡　おクチセックスどこでもお願いしちゃうゝゝゝっ♡」

「いつでもおちんぼムラついた時にガチおクチセックスうっ♡　甘々ドスケベおフェラチオしてええってゝ♡　都合良すぎる要求しちゃううゝゝゝっ♡」

「学校の中庭で物陰に隠れて跪かせて髪に指をうずめて頭を優しく両手で鷲掴みしてええゝゝゝゝッ♡　うっとり見上げてくる上目遣いと目があって、おおおおゝゝゝゝ、ドエロ目線ヤッべええゝゝゝっ♡」

（あなたの疑似フェラ音、アドリブここまで）

あなた、不意打ちにピースサイン。口を開けてピースをコールするのであどけない発声。

《いえーいっ☆　ぴーしゅ♡》

「おゝゝゝゝゝゝっピースだめええーっ♡　フェラ顔ぴーすなんてぜったいギャルピースよりやっべええおおっ♡　ぴーすうっ♡　そのぴーす顔好き好きいい♡」
「うぐうう♡　頑張れないいいっ♡　ででで、出るうーっ！」

《——頑張ってっ♡》

「……がっ……がんばりゅっ♡　……がはっ……はああっ♡」

「う……きゅっ♡」

「い……きい……あ……はああっ♡」

「はーっ♡　はーっ♡　……はーっ♡」

「……甘出し成功、これで何回目、だっけ？　……七回目？」

「亀頭責め続けると、いってないのにいきっぱなしになっちゃって……」

「エアフェラだった気がしないよ……妄想と現実が混ざっちゃって……学校の校庭から瞬間移動してきたような……そんなはずないよね……倒れそう。ふわふわ、しゅる……」

「ぴーす？　してくれたよね？」

あなた、スマイルとピースサインで応える。

《ぴーす♡》

まつり、先刻のあなたの不意打ち、抜け駆けのピース煽りが悔しい。

「……もおつ。それ、反則だよ。エロ顔で笑ってピースなんて……お返しだっ♡（まつり、あなたと同じくエロ顔で笑ってピース。↓）ぴーすっ♡」

まつりとあなた、満面の笑顔でピースの応酬、意地の張り合い。

《ぴーすっ♡》

「ピース♡」

《びすびーすっ♡》

「びーすっ♡ ぴーすびーす♡」

まつり、体力は戻らないが笑みを吹きだす。

「ぶっ……はははっ♡ すっごく楽しい……ねえ？ 笑ったまま、ピースしたままで、ね？」

まつり、疲労の濃い笑顔の下に、大蛇のような性欲がヌラリとうねる。

「笑ったまま、続き、しようよ……ぴーすっ♡」

《ピース♡》

まつり、ピースサインと笑顔のままで、利き手を亀頭のホールに伸ばし。

「ぴーす、ぴーす♡ ぴー……（ホールを回した瞬間、感電したように絶頂直前の研ぎ澄まされた性感に吼える。↓）スおおおほ……♡」

「ぴっぴっ♡ ぴいはいすうう♡ おおお……♡」

「ぼくたち今っ、アへ顔っ♡ アへ顔ピースしてるうううっ♡」

「ちっちゃい頃に一緒に写真撮った時と同じピースでえええっ♡ 今となっては見る影もなく発狂したアへ顔でえええっ♡ オナホ回してる反対の手でピースしてるおーっ！」

「うええ……いっ☆ 阿佐日まつりはあ♡ 初恋オナニーにドハマりしてえ♡ 頭オカしくなっちゃいましたあーっ♡ ぴいーすっ♡」

「もっと視姦してえ♡ 脳を焼かれてパーになっちゃった幼馴染みのアへ顔ピースっ♡」

「知能のないアへ顔晒してる最低幼馴染みびーすうっ！ ん、おほ……♡」
「今度こそダメっもう無理っ♡ 精液出ちゃう本イキしちゃう笑って死ぬほど絶頂極めちゃうおお……♡ ピースで飛んぢやううううーっ♡」

あなた、絶頂直前の満面の笑顔でダブルピース。

《両手を離して、だぶるぴーすっ♡》

まつり、思わずホールから手を離す。

「だっ——だぶる……ふっ♡ ううう……っ♡」

「両手を離してえっ、おお……あっ……あへええ……♡」

《びーすっ♡ ぴーすびーすっ♡》

まつり、気絶寸前のアへ顔でぼつちりとダブルピース。
「ぴっ♡ ぴっ……ぴーすっ♡」

まつり、ピースサインを両ほっぺにつける、まごうことなきアへ顔ダブルピースで、絶頂を回避する。

「はあっ……はあっ♡ ……うえへへ♡ ダブルぴーしゅ♡」

「これでえ♡ 八回目のお♡……甘出し射精、キメちゃいましたあ♡」

「阿佐日まつりのオナニー記録史上最高回数、トップとのタイ記録、でーす♡」

「うえ……い♡ ぴすぴーすっ♡ ぴー……す……う……（まつり、意識を急速に失う）」

まつり、ぐらりと体勢を崩し倒れる寸前、あなた、すかさずまつりを抱きとめる。

まつり、すぐに意識戻るが、寝言のように。

——左、『至近』（抱きとめて、まつりの頭は《あなた》の左肩の上）。

「う……あ……また……？」

「知らないうちに……だっこ、してもらってる……」

まつり、一瞬だけ気絶したのに、経過時間の感覚がない。

「ぼく、何時間ぐらい……？ 気を失ってた？」

まつり、あなたに強く掻き抱かれ、安心したように、とても儂く微笑む。

まつり、儂く微笑み、言葉はか細くても、望みは少しも揺らぐところがない。

「そか……一瞬だけなんだ……だったら性感、熱いままだから、まだ続けられる」

「あと一回の甘出しで、ぼくたちが最高記録……だよな？」

まつり、無言で抱きしめるあなたに、そっと、説くように、語りかける。

「大丈夫だよ？ ……絶対、叶えたいって、決めたんだ」

「大好きなひとと、一番気持ちよくなりたいって、ぼくが決めたんだ」

「だから、お願い……最後まで……ぼくと一緒に……オナニー見せ合いっこ……してよ」

「小さい頃とおなじように……ぼくとおなじ夢を、見てよ……」

あなた、寄り添う優しさで、しかし、悪魔のように甘く、囁く。

《乳首オナニー、忘れてるよ？》

まつり、きょんととして。

「あ……っ」

まつり、意外なことを突かれた小さな驚きが、獐猛な決意に、徐々に化けていく。

——正面、『至近』（間近で顔を見合わせる）。

「……そうだよね。乳首オナニー、忘れてたよね……乳首いじって、子宮かわいがってあげないと……淫乱でワガママで寂しがりなぼくの子宮、仲間外れは可哀想だよな……」

「抱き合ったままじゃ、乳首と亀頭、いじれないから……（まつり、《あなた》の隣に移動。
右、『近』↓んしょつ、と……肩、借りるね」

——**右、『近』**

「実は、あぐらかいて座ってるのも限界だったんだ……えへへ、くつついちゃおつと」
まつり、あなたと並んで肩を寄せ合う格好、足元に疊んでいたタオルケットを広げて。
「ぴったり、肩をつけて体重預けて……タオルケット、ふたりで肩にかけて……」

まつり、あなたの体温が沁み入るようで、呟く。

「……あったかいね」

「汗びっしょりの全裸だと、ちょっと冷えちゃったけど……くつついたら、寒くない……」

まつり、あなたの体温に安らいで、心は思い出に還る。

「ぼくたち……昔から、アブない遊びばかり、してるよね」

「ぼくたちが企むこと全部、大人にバレたら大目玉で……いつだって、本気だったよね」

「ぼくたちが一緒に足を踏みだすと、ぼくたちの世界が変わっていく。アブない冒険を繰り返して、まだ見たことのない世界をふたりで、目指してた……ぼく、幼馴染みの人生を、結構、滅茶苦茶にしてるかな……でもね？」

まつり、思い出に還った心で、あなたとの絆を確信する。

——**正面、『近』（位置関係そのまま、見つめ合うので音源が正面になる格好）。**

「……変なこと、言ってもいい？」

「何度も死にそうな目にあったけど……死ぬときは一緒にいい」

「でも、同じぐらい……ぼくを今、温めてくれてる命を救うのは、ぼくでありたい」

「ぼくが死にそうな時……救ってくれるのは、この世界にひとりだけだって、信じてる」

あなたとまつり、どちらからともなく、唇を寄せ合い、ついばむように、でもゆっくり、キスをする。

——**正面、『至近』。**

「……ちゅ……ちゅ……ん……ん……ちゅう……ふあ」

まつり、とてもほのかに、微笑む。

「キスしたぐらいじゃ、ぼくたちだけのオナニー……終わらないね♡」

「……そうだね。キスぐらい、するよね。ぼくたち、ずっと昔から、相棒だもん。今までキスしてなかったの、遅すぎるぐらいだよ」

「世界で一番大切な相手とは、キスぐらいするんだよ……♡」

「それに……ちくにー、見せ合いつこだって、するよね♡」

「また、乳首いじってるところ、見たいな……見せてよ♡」

まつり、あなたの耳に唇を寄せて、吐息で前振り。

——**右、『至近』。有声音囁き。**

「……はあ……あああ……ミダラな姿、見せ合いっこするのも、普通フツ……♡」

まつり、囁く。

「爪の先で……え♡」

「……かりっ♡」

「かりかりかり……かりかりかりかり……かりっ♡」

「かり、かり、かりかりかりっ♡ かりかりかり……かりかりっ♡」

「ふああ……またメス顔、溶けちゃってるよ……お♡ ……可愛い……♡」

「今度はあ、乳首摘まんてえ……♡ ぼくもする♡ 一緒に摘まむ……♡」

まつりとあなた、一緒に囁き合う。

「……くりっ♡」

《くりっ♡》

まつり、即落ち。

——右『近』。

「……ひゅおおおお……おお♡」

あなた、乳首つまみ煽りでまつりの乳首オナニーを援護。

《くりくり……くりっ♡ くりくりくりくりくり……♡》

《《あなた》、くりくり台詞の後、かりかり、くりくりをフレンド、囁きアドリブ開始》

「乳首だけなのがいい……♡ まだオナホ触ってないのがいい……♡」

「火がついちゃう……うっ♡ もっとくりくりいっ♡ 子宮に火をつけるうう♡」

まつり、悶える。

「んみゅう♡ みゅううう♡ あへえええ♡」

まつり、悶えながら、同じ感覚が伝わると、あなたに囁く。

「……（右、『至近』。有声音囁き↓）くりくりくりくりいっ♡」

——右『至近』。有声音囁き。

「お腹の奥、熱くてえ、疼いてえ……トロトロになっちゃってえ……指止まんないよお♡」

「ちょおっただけ、乳首くりくりしたただけなの……♡ もお、子宮淫乱発情、仕上がっちゃったよ……♡ ふたなりさんなのにメス堕ち、しちやったよお♡」

《《あなた》のかりかりアドリブ、ここまで》

まつり、急変。発情に支配された、彼女のいう所のメス堕ち状態。

——正面、『至近』。

「ふふふふ……♡ ちんぽ……♡」

「お、ち……ん、ぽお……っ♡」

——正面、『近』。

「おまんこトロけちゃってえ♡ せつくす♡ せつくすしろお♡ 目の前のおちんぽ押し倒してハメまくれ♡……ってえ、くそビッチおまんこが言ってるうう……♡」

「子宮、仲間外れは可哀想だなーってえ……優しくするとすぐ調子乗るう♡」

「ふあっ♡ ……うああ、だめだ……脳がメスになるう♡ 子宮が全部支配するうう♡ ちくにーは畏でしたっ♡ ぼくのオスちんぽ♡ 淫乱メス子宮に負け負けしちゃったあ♡」

「ちんぽっ♡ 幼馴染みおちんぽ欲しい♡」

「おまんこにおちんぽお……♡ ぶち込んで欲しくなってるううう♡」

「せつくすしたいいい♡」

「オナニー見せ合いつこしてるのにいい♡ 約束反故^{ほご}せつくすしたくてたまない♡」

——右、『至近』。有声音囁き。

「ねえ……ねえ♡ ……ぼくのおまんこに、おちんぽ♡ ぶち込みたい、よね？」

「メス堕ち淫乱おまんこが、ひくひくう♡ ……って震えてえ♡ おねだりしてるよお？」

「オスとメスのガチハメせつくす、したいよおって、ゆーわく♡ してるよお？」

——右、『近』。

「はわあああ♡ ド淫乱メスビッチに挑発されておちんぽビッキビキになってるよっ♡」

「シたいんだよね？ やりたいんだよね？ 本能で殴り合うせつくすをおおっ♡」

「キスしても終わらなかったぼくたちだけのオナニーを終わらせる本気交尾いいっ♡」

まつりの挑発に対して、あなたは、優しく。

そして、まつりも、まるで申し合わせたように。

ふたり、絶対的な確信で、声を揃えて、同じ言葉を囁き合う。

《でも、だめ》

——正面、『至近』。

「でも、だめ♡」

まつり、本心を看破されたことがとてつもなく喜ばしく、反射でホールの回転始める。

——正面、『近』。

「んんん……おとおお……ほおおっ♡ 正解ッ！ 正解いいい……っ♡」

「オナニーいいいっ♡ 始めるよおおっ♡ セックス目前なのにぜんぜん終わらないぼくたちだけのオナニーっ♡」

「ああああへえああ……乳首いいっコリコリコリ弄り回して孕みたがり子宮いちめながらあああ♡ 射精感仕上がっちゃってる龟头をクリクリいい……っ♡」

「オスもメスも全部オナニーで使いまくっちゃうううっ♡」

「ぼくたち最低ッ♡ 最ッッ低のオナニーフリークスうううっ♡」

「恋人同士のセックス妄想おらずにオナニーできる下底辺の下変態いいいっ♡」

「ただ激しいセックスする恋人同士じゃ全然足りないよっ♡ オナニー見せ合いっこする恋人同士になりたいよおおっ♡ なってるっ♡ 狂った恋人同士になってるーっ♡」

「せつくすしたいしたいしたいいっ♡ セックス妄想オナニーしちゃうおおおっ♡」

「したいセックス一杯あるううっ♡ ドログチャ妄想っ聞いて聞いて聞いてっ♡ 種付けっ♡ 種付けプレスして欲しいってずっと前からっ♡ 交尾が怖くて、なのに気持ちよくなりたくて、おへその奥で震えてる、ぼくの臆病な子宮ううっ♡ 押し掛^かかられて動けなくされておちんぼでドスドス衝いて欲しいってずっと前から夢見てたんだあっ♡」

「でもでもでもしたらあああっ♡ ぼくのおちんぼがお腹に当たっちゃうっ♡ ドン引きされたらどうしようっ♡ でも絶対幼馴染みのお腹でおちんぼコスると気持ちいいに決まってるよっ♡ お腹だけじゃなくて肌という肌におちんぼコスりつけて自分勝手射精精べつちよおーってブっかけてっ、大好きな幼馴染みをティッシュ同然に扱ってお肌で精液拭き拭きしたいって妄想でオナニーめっちゃめっちゃ^{はんど}挿^はってたけどそんなのダメダメダメ♡ そんなの最低だって判ってるのにいいいっ♡♡♡」

「したいっ♡ したいしたいしたいっ♡ 最低おちんぼセックスもしたいいいいっ♡」

「絶対嫌われちゃうのにいっ♡ おちんぼとおまんこ全部きもちーふたなりせつくすっ♡ したかったんだよおおおっ♡」

あなた、返答としてまつりの唇を食るように奪う。

——正面、『至近』。

「っじゅうううう♡ あああ♡ はええええ♡」

——正面、『近』。

「らつらめええ♡ キスしながらのオナニーは反則うううっ♡」

——正面、『至近』。

「ちゅちゅじゅっ♡ ぷああっ♡」

——正面、『近』。

「あへえええ♡ 恋人ディープキスニーは実質セックスと一緒にすううう♡」

——正面、『至近』。

「ぢぢぢゅううう♡ ぷああっ♡」

——正面、『近』。

「へおおおっ♡ おくちの粘膜って性器と一緒にだあっ♡ 新発見だよおおおっ♡ フエラチオオナニーも超気持ちいいに決まってるおおおっ♡」

「でも今日のところは亀頭のオナホに免じてペロフエラで勘弁してあげよっ♡ ペロフエラオナニーしてあげちゃうよっ♡ じゅるじゅる吸ってあげるよっ♡ 舌伸ばしてっ♡ ほらほら、ほーあっ♡ こんなふうがいい♡ (正面、『近』、『至近』。舌を伸ばして迫っくる) あへええええっ♡ あへええええっ♡」

まつり、べーっと口を満開に、舌を隙だらけに虚空にひくつかせて伸ばす。

あなた、まつりが隙だらけなので当然、まつりの舌を男性器をそうするように唇で吸う。

《じゅじゅじゅじゅじゅじゅじゅっ♡》

——正面、『至近』。

「おぼおおおおおお♡」

「こっ♡ こらーっ♡ ほくがするのおおっ♡ ほくがしてもらってどーすんのおおっ♡」

《ちゅうああ……じゅるっ♡ じゅぼっじゅぼっじゅぼっじゅぼっ♡》

「(あなたに強引に舌を吸われて呻く。↓)おぼあーっ♡あえっ♡おあっ♡ほぼっ♡あ、あゝゝゝつ、あ、え、あ、あゝゝゝ♡」

《じゅぼじゅぼじゅぼじゅぼじゅぼじゅぼじゅぼじゅぼじゅぼっ♡》

「あ、あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ♡」

あなた、舌フェラを停止。

《……ちゅぽおっ♡》

まつり、あふあふ言ってる。

——正面、『近』。

「……ふえっ♡ はひっ♡ ほっ♡ ほおおっ♡」

「……しゅきい♡」

「キスニーきもちよすぎい♡」

「してあげてもしてもらっても全部しゅきい♡」

「ぼくのおくちまんこお♡ べろちんぽでキスセックスしてええ♡」

「ぼくもべろちんぽでおくちまんこキスセックスしゅるうう♡」

まつり、舌を突き出し、キス待ち顔どころではないドロドロに溶けた発情顔。

——正面、『至近』。

「ええええうあああゝゝゝゝ♡♡♡」

「ほあっ♡ ほあーっ♡ ほおおおああああっ♡」

まつりとあなた、イヌ科の動物が口吻を互いに重ねて噛み合うようなディープキス。

「(吸う。↓)じゅじゅうじゅうううっ♡ (耐える。↓)んんんっ♡」

「(舐めあう。↓)れるるるるるれろろ……(粘膜の快感に呻く。↓)おぼおおっ♡」

「(少し離れて、痴呆のように笑う。↓)ああはっ♡ うえあははは♡ (再びディープキスへ。↓)あぶううう♡ じゅろおおおおっ♡ じゅじゅじゅっ♡」

「(息継ぎ。↓)じゅばあっ♡ (深くキスに溺れ合う。↓)じゅあっじゅううううっじゅろろろろろっ♡ じゅううう……じゅっ♡ じゅあっ♡ じゅるじゅるじゅるじゅる……」

「……(ディープキス、お互いの限界に到達、中断される。↓)ふはっ♡」

——正面、『近』。

「(まつり、正気と夢が混濁して呆け切っている。↓)……らめ……♡ らめえ……♡ 精液溢れちゃう、漏れちゃう……(急変、性的ボルテージ沸騰。↓)ひっ♡ ひあっ♡」
「もっ、もおっ♡ いっちゃう、ああ、もうだめ、あがってきた♡ がまんなんて、出来ないいい♡ 指が止められないいい♡」
「あーっ♡ あーっ♡ ああああ……♡」
「いってるのかいってないのかもわからない……♡」
「いってないのにいぎっぱなじになっでるヴううう……♡」
「射精爆発しちゃううう♡ 助けてっ助けてええっ♡ もう一回、もう少し、あとちょっとの我慢なのがいいいい♡ 止めてええええっ♡ ぼくをとめてええええっ♡」

あなた、優しく囁く。

《両手♡ ちょうだい♡》

まつり、瞬時の理解か、藁にもすがりつく心地か、絶対の信頼で救いの手を取る。

「——うんっ！」

ふたり、(あなた、背後から腕を回す) 両手の指を絡め合う恋人繋ぎ。
右手で右手、左手で左手を掴まえる格好。

——正面、『至近(背向け)』(まつりがあなたに、後ろから掴まられている)

「つつほおおおっ♡ おててえっ♡ 繋いじゃったああっ♡」
「ほわああ……♡ これって♡ 恋人繋ぎっ、両手で恋人繋ぎいい♡」
「指絡め合っちゃう恋人繋ぎっ♡ (絶頂寸前の多幸福感。↓)おっ♡ おおお♡ お
~~~~♡」  
「ぎゅってっ……ぎゅううって……してよ……おお……♡」

まつりとあなた、顔を寄せ合い目を瞑り、手を結び合って、絶頂に耐える。

《ぎゅっぎゅっ♡》

——右、『至近』。

「ぎゅーっ♡ ぎゅっ♡ ぎゅっ♡ ぎゅーっ♡」  
《ぎゅぎゅぎゅっ……ぎゅーっ♡》  
「ぎゅううう……オオッ……ぎゅうう……ぎゅうううう♡」

まつり、土壇場とは正にこれ、微かな性器への刺激で絶頂に到達する寸前を耐え、全身と脳神経を荒れ狂う性感を僅かにでも逸らそうと、呻き、唸り、喘ぎ、呟く。

「うっ♡ くっっ……♡ ウおおっ♡ ……おお……♡」  
「あっ……いってないのに、きもちいい……きもちいい……♡」

あなた、恋人の手を掴まえたまま、恋人に囁いてあげましょう。

《好き♡》

まつり、肉体の感覚に耐えている所に幸福感を投入されて性器でなく心が絶頂する。

「——ふああっ♡」

《好き……好きだよ……好き、大好き……♡》

「うあ~~~~あっ♡ ぼくっぼくも好きっ♡ 好きいいいい♡」

《知ってる♡》

「大好きいいっ♡」

まつり、至上の幸福に満たされながら、暴れる肉体の性感を呼吸で制動開始。

まつり、呼吸音、やや細かい。苦しんでいるようにも、笑っているようにも聞こえるか。

「はっ♡ はっ……はーっはーっ♡」

「はーっはーっはーっ……はっ♡」

「はっ……っ♡」

「……………（まつり、ブレーキング、完了。↓）はああああ……っ♡」

まつり、まるで今が、現実とは思われない、ぽつりと。

「……できた……」

「甘出し射精、九連発……達成、しちゃった……」

まつり、あなたに頬ずりする。言葉は、ふわふわとして、うっとりとして。

「出来た……できたよ……溢れちゃいそう、だよ……」

「夢みたい……ぼくたち、おんなじ夢見てる……叶っちゃってる……」

「もう限界……だよね？ ちよつとオナホ、触っただけでも絶頂が始まっちゃいそう……狂おしいほど気持ちいい……大好きで、しあわせで、倒れそう……一緒、だよね？」

「ねえ……いいかな？」

まつり、夢を見ているように、しかし不思議と意思のある声で。

——正面、『近』。

「ぼくが……いかせてあげたい」

まつり、両手を繋いだまま、あなたの抜け駆けを封じた格好で。

「ぼくとおんなじで、甘出し射精連発が気持ちよすぎて苦しい筈なのに……ぼくを何度も助けてくれた。もう駄目だ、いっちゃうって、何度も諦めかけたのに……」

「優しく、えっちに、いっちゃいそうなギリギリを、攻め続けてくれた……」

「だから、今度こそ……ぼくがお返し、したいんだよ」

「亀頭のオナホを、ぼくがこの手で、ぐちゃぐちゃに回してあげたい」

「絶頂まで、引っ張って行っあげたい」

「もう、オナニーじゃなくなっちゃう……囁いて、キスして、手を繋いでも、おちんぽにまだ、触ってない……絶頂させてあげるのは、セックスになっちゃう」

「怖いよ……だけど、でも……ぼく……」

あなた、まつりにそっと、弾みを渡す。

《ふたり一緒でも、怖い？》

「……（ポロっと、本心がこぼれ落ちる。↓）ううん。怖くない」

《それが、答えだよ》

まつりに、理解が訪れる。

「……そうだね。嬉しすぎて……一番気持ちいいふたりになれたこと、好きだって言ってくれたこと……お返ししたくて、ぼく自身のこと、忘れちゃった」

「ぼくたち、気持ちいい所、見せつけ合うのが、大好きなんだ……」

「ぼくたちだけのオナニー見せあいっことは、いく時もふたり一緒だよね」

「いかせあいっのなら、ひとりじゃないから……おちんぼ触るの、ぜんぜん、怖くない」

まつり、少し照れたような、またはちよつとだけ、あなたに圧倒されて。

「それに、さう……気付いてる？ 今日一番の、スゴイえっちな顔、してるよ？ ぼくのおちんぼ、いかせたくてウズウズしてるって顔……（これまでの自らの痴態をふと顧みて。↓）

ぼく、おちんぼ顔、見せつけ過ぎちゃったかな……おまんこよりおちんぼが好きになっちゃったとか……（自分はひよつとしてとんでもないことをしてしまったのではという危惧に思い至って。↓）

ぼく、幼馴染みの男の子のセイヘキ破壊しちゃったのかな……っ？（慌てて。↓）

うわあ待て待て、そのフェラ顔、今は禁止禁止っ」

まつり、気力体力ともにへろへろだが、気を取り直して、態勢を仕切り直して。

「ぼくたち、<sup>シユクシユク</sup>肅肅といかせあいっこするの。相手のオナホだけを触ること、いいねっ？」

まつり、結んでいた手を解き、あなたのオナホをそっと摘まむ。

「ほら、オナホに触るけど、まだ回さないよ？ オナホに指を添えるだけ……まだだよ、

まだ、ほら……ぼくのオナホにも、触って、よ……」

ふたり、かくして、ようやく互いの男性器に触り合う事態に至るのであった。

まつり、もう、すぐにでも始まってしまう行為を予感し、興奮が喉に詰まるようで。

——右、『近』。

「……オナホ越しでも判る、う……熱くて、硬くて……逞しい、おちんぼ様だ、よ……♡」

「ワクワク、する……ぼくたちどっちが、エロエロな悲鳴をあげさせられちゃうのかな？」

「ぼくたち、どっちが、ヨワヨワおちんぼ、なのかな？」

——正面、『近』。

「……オナホは横回転、だよ？」

「縦にピストンして、すぐいっちゃうなんて、つまんないよね？」

「亀頭、いじめるなら、絶頂を引き延ばされるのがイイよね？」

「でも容赦なく、いかされちゃうのが、イイよね？」

——正面、『近近』。



くんびくんびつくん……痙攣、しゅっごおお♡……っほおお♡

——正面『至近』。

「幼馴染みおちんぽっ♡ ぼくの指で……いつてるううう……っ♡」

「ほんとにぼくたちいかせあいっこっ♡ しちゃってるううう……っ♡♡♡」

まつり、頭蓋が破裂するような絶頂は尾を引きつつも徐々に収束に向かい。

まつり、ぐらりとよろめき、『あなた』の腕に抱きしめられる。

「あっあ……お……おっ……おお……お……ほおお……♡」

「おおお……♡ おっ……ほおお……お……お……♡」

「お……」

「あ……あ……」

「はっ……あ……あ……」

まつり、絶頂をついに抜ける。

「……はあ……は……♡」

「いっちゃった……もう、なんにも出ない……よ……」

まつり、もう半分以上意識が飛んでいる。

「オナホ、抜いちゃうよ？ ……紙コップに精液、どれだけ出たか見せて……わああ♡」

「精液……精液♡ どんどん、出てくるううう♡」

「しゅごい量だよ♡」

「ぼくのも見せて♡ ぼくの精液いい♡（ホールを外された刺激で声が出る。↓…

…んみゅっ♡」

「ふあ……とっふとふう……一日でこんなに精液出たこと、ないよお……♡」

「やったよお……ぼく、一番気持ちいいオナニー……一緒に、できたよお……♡」

まつり、ずるりと、あなたに全体重をかけて、ともに床にひっくり返る。

——右『至近』。

「……もう座ってるのも無理……一緒に寝っ転がっちゃう……床、かた……」

「（もう理性がないので完全に甘えモードで抱きついてくる。↓）ひっついたお肌が……あったかい……」

「……いっしょに、お昼寝……しよ……」

「ふふ……くふふ♡……ちっちゃい頃みたい、に……いっしょに、お昼、寝……」

まつり、昏倒。

トラック6——エピソード

まつり、寝息。規則的な呼吸音、熟眠、リラックス。

——右『至近』。

「すー……すー……すー……」

「すー……すー……すー……」

まつり、身じろぎした拍子に、覚醒に向かう。

「……んう……ん♡」

まつり、満たされている夢うつつに、目を薄く開く。

——正面『至近』。

「う……ふ……あ……♡」

「ふふ……ふふふふ……♡」

「ごめん。しあわせすぎて、笑っちゃう」

「……夢みてるのか、目が覚めたのか……わかんないや……♡」

「大好きな目が、ぼくを見てる……」

まつりとあなた、どちらからともなく、唇を寄せ合い、キスをする。

唇と唇がデ IPP に触れ合うような、寝ぼけて甘い夢を引き摺るキスをする。

「ちゅ……♡ ちゅっ……ちゅうう……ちゅ……♡」

まつり、すっかりトロけ顔。

「ふふふ……お目覚めのチュー、しちゃったあ♡」

「なんだか、全部、夢みたいだよ……♡」

「甘出し射精、繰り返して……いかせあいっこ、して……」

「ふふ……ふふふ……♡ きもち、よかったあ……♡」

まつり、ふと、体に残る、激しかった情事の残照を、思い出して。

まつり、僅かばかりの前のことが、いとおしく、まぶしく。

「体が覚えてる……夢じゃないんだ」

「……ぼく、今日のこと……絶対、忘れないよ。大切に、思い続けるよ」

「ずっと、夢見てたことが、叶ったんだから……」

まつり、窓の外を見る。

——右『至近』。

「……一晩ぐらい眠った気がしてたけど、まだ夕方前……つてところだね」

「オレンジ色の太陽……夕暮れほどきれいじゃないけど、ぼく、この時間の光が好きだな」

「夏がずっと、続いていく気がするから……まだ、これから何でもできる気が、するから」

まつり、心があなたに向き直る。誠実に、言葉を重ねて、本心を探していく。

——正面、『近』。

「ねえ。いいかな」

「……ぼく、まだ、してみたいことがあるんだ」

「心の底から体の全部で、限界を超えてオナニーみせあいっこしたみたい……一生忘れられない、セックスがしてみたい」

「……ぼく、ちんちん、ついてるけど」

「男の子とも女の子とも違う……ふたなりセックスしか、出来ない体だけど」

「……正直に言うかね。両方したいんだ」

「入れて貰いたいのと同じぐらい、入れてあげたいって、思ってる」

「王子様みたいにカッコよく抱いてあげたいし、発情したメスになって浅ましく誘いたい」

「……どっちもなんて、欲張り、かな？」

「それにさ？ 衝動的に狂っちゃうと気持ちと体が暴れちゃって、傷つけちゃったり、嫌われたり……するんじゃないかって……怖いけど」

「でも、したいんだ。全部、したい。全部で愛し合いたい」

「ワガママ言ってるって、自分でも思うんだけど……ずっと昔から大好きな、この世界にたったひとりだけの幼馴染みと、セックスがしたいんだ」

まつり、重ねた言葉から、今の答え、本心を導く。

「だって……ぼくたちの、『好き』の、本当の形は、まだぼくたちにも判らないんだもの」

「ぼくたちの中にずっとあるけど未知の、新しい世界を……一緒に探したいんだよ」

「ふたりで、その夢を……一緒に、叶えたい……だめ、かな？」

あなた、答える。

《判ってることは、あるよ？》

《傷つけるのは嫌で……》

《大好きなのは、ドロドロに気持ちよがってるお互いの顔と声で》

《もっと気持ち良くしてあげたいのと同じぐらい、心と体を相手に開いてる》

《ぼくたち、おんなじだよ》

《我慢して、水臭いこと言って心を誤魔化しても、ぼくたちふたりの冒険は始まらないよ》

《欲張って、ワガママに、欲しいものの全部、ふたりで手に入れよう》

《受け容れ合っているから大丈夫。ぼくたちだけのセックスを、きつと、見つけよう》

まつり、目を閉じ、あなたの胸に頭を預ける。

まつり、眩しいような、照れたような、嬉しいような、安らぐような、心もち。

「……うん」

「ぎゅって、して……」

あなた、まつりを胸にかき抱く。

——正面、『至近、やや下から』。

「……本当に、ありがとう」

「これまでも、これからも……今も。そばにいられて、ぼく、しあわせだよ……」

僅かに時間が経過。カラスの声とか窓の外から聞こえたり。セミの声が聞こえたりする。まつり、あなたの胸から体を起こす。

——右『近』。

「……さ、起きるよ」

「もうちよつと抱き合つて、いちゃいちゃしてたいけど……昔からよく言うでしょ？」

まつり、ちよつとおどけてみたりして。

——右『中』。

「遠足は家に帰るまでが遠足で、オナニーは証拠隠滅するまでがオナニーだ……つてさ♡」  
「えー？ 言わない？ いやいやいや、言うんだよ。オナニーを愛するオナニストなら常識だよ」

まつり、ドヤ顔がキュピーンとか光っちゃう。

——正面『中』。

「片づけ終わったら、シャワーかな。汗ビツショリどころか色々と体液デロデロに排出しちゃったし、ここでひとつサッパリしたいよね」

「どっちが先にシャワー使う？……（自分が迂闊なことを言ったと気づき。↓）あつ」

まつり、急にドキドキしてしまう。

まつり、上目遣いで、全く弱々しく、そして健気に。

——正面『近』。

「……一緒に、シャワー……する？」

「昔、用水路に落っこちた、あの時以来だけど……一緒に」

「——なっ……なんで……こんなに恥ずかしいんだろ……や、やだなー。はは……おちんぼいかせあつた仲だつていうのに、洗いっこぐらい、どうってことないよね？」

あなた、ここで挑発しなければえつちな男とは言えませんか？

あなた、壁ドンでなければ顎クイぐらいしてそうな、そういう距離感で。

《いいけど、セックス、始まつちやうかも？》

《むせ返るような湯気の中で、抱き合つちやったら、どこまで……しちやうのかな？》

《濡れた髪と瞳を前にして……襲わずにいられるかな？》

まつり、顔面まっかつた。

——正面『至近』。

「ひやううう……♡」

まつり、あなたの肩に顔を乗せて、耳元で、気丈にも、強がって、囁いて返す。

甘々と甘出し——ボーイッシュふたなり幼馴染みと卵型オナホで甘々ルーインドオーガズム♡

——左、『至近』。

「……言ったな？ 精液、からっぽのくせに……いいよ？ やっちやうよ？ 理解<sup>わか</sup>らせ  
てあげるよ？」

——正面、『至近』。最後は間近で、見つめ合うイメージで終わります。

「一緒に……気持ちよく、なろ？」

——  
おわり